

て坂本川路其外只今間ニ罷出候仍て別段返答之趣辭も無之明日ハ是非如何ヨリ可相成筈ニ有之趣ニ申置候尤延引ニ相成候次第ハ昨日ハ黒田開拓次官樺太一件申出相成今日ハ樺太之事ニ事ニて魯公使云々之事御評議有之右等ニ事故延引相成候い侍を明日ハ如何セ口上ニて御示し相成る歟御書付ニて御示し相成歟可有之申置候ニ付今夕川路坂本被罷出候ハ、左様御さし含被下度候

御返答之辭ニ政府御困リ有之様相見不可然セ存候付榎村一件ハ決して寛宥之御處置ニ無之同人糺彈の上ニて可取調事件出来直取調之間拘留被差免候追て今ニも榎村取調ニ可相成時ハ又候拘留可相成歟も難計其外近衛兵士等云々も過日書付ニて御覽ニ通りニ申置候尊老セ小子セ口上齟齬不可然セ相考候付爲御合申上置候也
佐々木之談しヨも得能氏を警保頭ニハ如何セ被申候小子ハいまた返答も不仕致置候明日御相談可申上先御さし含おき被下度候也

十一月十日
大久保様

七木

大木

大久保様

七四七 岩倉公への書翰 明治六年十一月廿一日

(岩倉家文書)

【按】公ノ書ニ答へ宮本外務大丞復命ノ時刻通達ノ件及ヒ供奉

ノコトニ付キ具申シタルモノナリ

御翰拜讀仕候宮本堀ハ明日一字与尙又申達可仕候明日

天覽ニ付供奉ノ事ハ昨日も全ク不承候間何人供奉与申事も申談不仕候得

共參議兩三名ニ亦も可然奉存候間以御勘考御通被下候様奉願候

勅諭之儀ニ尙參上可申上候此旨拜答ノミ如此御坐候也

十一月廿一日

利通

具視公閣下

【解説】堀ハ樺太駐劄開拓監事タリシ基ニテ宮本外務大丞等ト

共ニ着京シタルナリ天覽トアルハ軍隊調練天覽ノコトニテ二
十二日午前十時聖上櫻田操練場ニ臨幸シ給ヒ近衛・鎮臺・教導團
ノ三兵七大隊ヲ閱兵アラセラレタリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰明治六年十一月廿一日

(大久保家藏)

明廿二日調練

天覽ニ付御互供奉之事先日御評議之砌赤坂參入夫ヨリ御供之事ニ談
し候様存候間右ニ治定致度存候事

一必一同ニも不及と存候間小生ト三木二人計リニ亦可然哉昨日如何
御申合ニ哉如何様共御賢考次第夫々可申遣と存候

一自今追々度々可被爲在哉と存候間政府も不差支様致し置度事と存
候

天覽後 勅諭之事一帯御勘考之上御返事之趣承リ度候御書取ハ誠ニ
御大事且此節之事何も不被爲在方ニ亦ハ如何と存候先日厚キ御沙汰

も水泡同様之末故旁有體申入候事ニ候

堀宮本御呼出之事兩人共明日一時ヨ御治定可然と存候尙御取計可給
候

此外御答書之條々何も承り候別段御返事不申入候早々以上

十一 廿一

具 視

利 通 大 人

七四八 岩倉公への別啓書翰 明治六年十一月廿一日 (岩倉家文書)

【按】練兵親閱ニ關セシモノニテ前書ト共ニ公ニ呈セルナリ

御別封氣不相付別紙之通御答相認候處跡以御別封見出候付別帯御答ハ其
マ、ニ亦差上候明日 天覽ニ付御書取之事ヲ猶あとより御答可申上候十
時前ニ

皇居に御出之義ヲ承知仕候左候得ハ何を調練迄も御隨從之筈ニ候得ハ堀

十時呼出ハ矢張十二字后ニいさし候方可然与奉存候兩人共一字といさし候ハ宜クハ有御坐ましくやト奉存候也

十一月廿一日

利通

【参考】其一岩倉公より大久保への書翰明治六年十一月廿一日 (大久保家藏)

兵隊訓練 天覽ノ事彌明廿二日午前十時被 仰出諸隊御引連之趣今

朝徳大寺入來承候事ニ候就ハ御互ニモ十時迄

皇居ハ參入心得ニ候外三木モ先日申合候末故承知之事ト存候扱別紙

隊長以下ハ御沙汰ニ相成候旨同卿内談尤吉井ヨリ申出候旨定テ御承

知之事ト存候得共小生ニハ不可然哉ニ相考ヘ申候其一ツハ今度變動

ノ末内地何か事アル様御用意ト見ナシ迎候物ニハ不相成哉一ツニハ

兵士ノ心ヲ取セラレ候爲メ余リ卒爾之御沙汰シテ不相當哉ト深ク愚

慮致シ候ニ付早々御談シ申入候厚ク御注意被下度如此候也

十一月廿一日

具視

大久保殿

【参考】其二岩倉公よりの廻達書明治六年十一月廿一日

(大久保家藏)

明廿二日十時練兵

天覽ニ付御互九時半頃 皇居參入直ニ供奉可致義ハ先達之砌御約

束之事候得共政府上之義モ何物其外段々遲滯兼不都合ト存候折柄

ニ付左之通相分レ勤仕有之度候

皇居參入

具視

大久保參議殿

木戸參議殿

右凡正午十二時御用濟直ニ政府へ出頭之事

政府參入

大隈參議殿

寺島參議殿

伊藤參議殿

勝 參 議 殿

右

但シ明廿二日午後一時外務宮本開拓堀等召出シ有之候間御同席ニ
亦承知致度は又御心得迄申入置候

右之通殿方はモ申入候間爲念申入候也

十一月廿一日

具 視

大久保參議殿

【參考】其三岩倉公より大久保への書翰 明治六年十一月廿一日 (大久保家藏)

昨日御細答令一見候

- 一 陸軍省支那行云々定テ御取計被下候事ト存候
- 一 警保寮ノ事ハ實ニ懸念致シ候書取ナク相濟候ハ、重疊此事ニ存候
- 一 宮本堀明日午後時限ヲ被定召之事御取計被下候事ト存候
- 一 堀 御前の召云々義廿四日ニ取計可申心得ニ候

一 久光卿之事ニ付一應御咄申入置度其内別段面上可申入ト存候
右書添申入候也

十一月廿一日

具 視

利 通 殿

且申候明日ハ外國人來客候得共堀宮本召刻限ニヨリ來客延引致候
間御一筆御示可給候也

七四九 岩倉公への書翰 明治六年十一月廿一日

(櫻原新輔氏藏)

【按】宮中服制ノコトニ付キ意見ヲ述ヘタルモノナリ

過刻ハ御返書敬讀仕候今朝申上候御服之御事早速條公御示談被爲在此節
之處御布告等ニ不及宮内卿限リ相心得思召次第ニテ可然との御事ニテ明
日條公へ御伺可相成との趣謹承仕候就るま再三言上も恐懼之至候得共今
朝縷々申上候通此際

主上よりして卒先し御旨趣洞徹仕候様無御坐候てハ些少之事よりして辭柄ヲ設ケ世上ヲ眩惑スル即今之形情ニ付此機會ヲ以斷然被爲改候方可然との微志ニ有之候如命今日之處ニテ表通り御布告等ニ不及思食ヲ以被爲決宮内省限リ心得ニテ素より相濟候事ニ奉存候乍去前條之次第可然ト兩大臣公ニおひて御見込被爲付候ハ、可然トノ事ニ決して 奏上被爲在候様希望仕候可否御決裁難被爲調兩端ニ涉リ候事ニ候得ズ
宸斷ニ被爲任御當然ニ可有之候得共如此事件可否判然タル事と奉存候唯思召之所在と相成候亦も乍恐
御上之御決着如何ト奉案候斯ク切迫して申上候も畢竟關係スル處輕カラスト愚考候より難默止寸楮此段勿々如此御坐候乍恐今一應御勘考之上條公へ御談被成下候様千祈萬禱仕候頓首多罪

十一月廿一日

利通

岩倉公

七五〇 税所篤への書翰 明治六年十一月廿四日

(大久保家藏)

【按】堺縣令タリシ税所ノ書ニ答へ征韓論破裂ニ付キ自己ノ心事ヲ告ケタルモノナリ

拜呈其後御安康被成御坐奉敬賀候次ニ小子碌々相勉候付乍餘事御降慮可被下候此内之御投翰辱拜誦仕候折角御出京御待申上候處豈圖御因循流石お年の寄リ申候此度之劇場疾ニ御直聞も有之候半委曲ハ何も不申上候實ニ不得止時宜ニあり立當夏一生之樂反して一生之災難与相成是又天賦与やいもん只々世上之口ニ任セ候外無御坐候決而陳述之賦もあし此上之盤上一盃之敗を取候歟又勝ヲ取候歟投ケサセルカ投ルカノ二ツニ御坐候畢竟此災難之期したる事よてそれ故千思萬慮實ニ肝膽を碎キ容易ニ進退不致候得共終ニ不得止機會与相成舞臺懸りニ出懸候處果して一幕終らば舞臺崩れ勸進元之大損ニ相成候之し未勸進元之金元續き候故是より

跡幕を開キ格別ニモつしも無之候得共幸ニ天氣もよろしく候付今三四十日之間ハ凡模様も相分り可申候兎角懸ケテハ種々之評判御承知ヨテ御案可有之候得共幕を仕舞候までハモのからハ雜説を御信用被成ましく候分申上置候也

一次郎殿も別ニ勉勵休暇ことハ入來至テ元氣マテ候少しも御懸念有之ましく候随分材器も有之候評判もよろしく候

一近來寸暇無之甚御不沙汰申上候乍去休日ハ大畧ハ松陰ト内證マテ相争セ候同人も來月ハ一應歸坂ニ由何も御直聞可被成候藤井々今度相運候付御安心之筈ニ奉察候

右任幸便御回答旁如此頓首々々

十一月廿四日

利通

税所篤兄閣下

【解説】書中劇場トアルハ征韓論當時ノ政局ノ意當夏一生之樂

トアルハ關西旅行ヲ指ス次郎ハ東京遊學中ノ税所ノ男松陰ハ五代友厚ノ雅號ニシテ「相争」ハ圍碁ノコトナリ

七五一 岩倉公への書翰

明治六年十一月廿五日

(岩倉家文書)

【按】佐倉行幸ノ延期警保寮建白ノコト及ヒ内務卿人撰等ニ付

キ公ノ書ニ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候佐倉

行幸兵部省申立ニ付御延引ニ由承知仕候明朝九時半參上仕候様承知仕候警保寮云々之儀大木ハ委曲承知仕候猶談合仕同人明朝少し早目參上御談申上筋咄合仕置候間御聞取ニ上御決定有之度尤何モも御貫徹相成候處肝要ニ奉存候

内務省御人撰ニ儀ハ即今ニ形勢マテハ愈以御大事与奉存且云々之事情も有之旁別人ニ方可然与奉存候只小生謙遜而已ヲ以申上ルニアラス一翁ハ

老練殊ニ人望之歸スル處も有之當時惡評与申ハ府下のミノ事与愚考仕候
間篤与御熟考且衆評も御容サセ可被下候

右拜答迄如此御坐候頓首

十一月廿五日夜

利通

具視公閣下

猶々九字過ムハ參上可仕与奉存候間若御評議中ニ候ハ、御扣サセ被
下候様奉願候也

【解説】内務省創設ノコト決定スルヤ岩倉公ハ利通ヲ内務卿ニ
補任セントセシカ利通ハ考慮スルトコロアリテ之ヲ固辭シ東
京府知事タリシ大久保一翁ヲ適任者トシテ推薦シタルモノナ
リ然モ二十九日ニ至リ遂ニ利通參議ヲ以テ兼任スルニ至レリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰明治六年十一月廿五日

(大久保家藏)

○佐倉 行幸之事兵部が言上都合有之御延引相成申候子細アル事ニテハナシ

○明朝九時來臨之處貴卿丈ハ九時半御出可被下右々内務省人體評決
之譯ニ候

○警保寮申立ノ事大木ヨリ御聞と存候小生不行届ナラハ判然何々様
被仰付候も少しも異存無之候

尙萬事明日御談可申存候早々以上

十一月廿五日

具視

大久保殿

必不待貴答

七五二 岩倉公への書翰 明治六年十一月廿八日

(櫻原新輔氏藏)

【按】奏聞スヘキ時務數件ヲ認メテ呈出シタルモノナリ

別紙差向言上可相成事件相認差上申候箇條之内奏聞濟之事も可有之歟も
難圖ニ付御取捨可被下候尤丸點之分明日を言上相成候也宜鋪クハ有御坐

ましくや新ニ御評議之件々思食次第ニ可然乍去海陸軍更張樺太云々々先ッ御内評凡治定之上ニ上聞有之候方可然奉存候○大久保東京府知事進退々速ニ御治定被爲在度奉存候

右可申上如此御坐候頓首

十一月廿八日

利通

具視公閣下

尙々過日御廻相成候書類覺書之通返上仕候餘々制度調局に差出申候

七五三 岩倉公に呈せし覺書 明治六年十一月廿八日 (岩倉家文書)

【按】前掲書翰ニ添ヘテ呈シタルモノナリ

一 外國人内地旅行之事

各國公使ヨリ申立

一 海外生徒之事

一 制度取調局被設候事

一 官祿并ニ華士族賦税之事

此條昨年春廟議一決伺定相成候事故分る變議之形行可被遂奏聞事

一 榎村裁判之事

一 魯國使節年内早春ニ懸ケ被差出候事

魯國公使清國在留云々之事

外ニ未定ノ事

一 海陸軍更張之事

一 樺太混雜始末云々開拓次官建白堀同斷ニ付御答之事

一 北海道に移民農兵軍艦調文云々建白之事 開拓次官

【解説】海外生徒之事トアルハ當時政府及ヒ舊藩ヨリ派遣セシ留學生ヲ召還セントスル廟議アリシコトニシテ十二月廿五日

開拓使差遣及ヒ文部省管理ノ留學生ニハ悉ク歸朝ヲ命スルニ至レリ第三項ノ制度取調局ハ十九日ノ閣議ニ於テ設置ニ決定シ工部卿伊藤博文外務卿寺島宗則ヲコレカ掛ニ任シタルカ蓋シ歐米諸國ノ情勢ニ鑑ミ我カ政體ヲ變更セントシテ諸般ノ制度ヲ調査セシメントセルナリ第四項ハ國費ノ膨張ト陸海軍擴張ノ爲メニ官祿家祿稅ヲ賦課セントスルコトニシテ木戸ヲ始メ異議ヲ唱フルモノ多カリシモ利通最モ主張シテ十二月廿七日ニ家祿稅ヲ更ニ翌日官祿稅ヲ賦課セリ

【參考】其一 利通日記抄 明治六年十一月

十九日六字參朝政體取調等ノ一今晚御評議相願候六字ヨリ參議一同岩公亭ニ集會議論魯西亞公使ニ返答ノ一政體取調寺島伊藤兩人ニ專任被命ノ事ニ決ス魯西亞ハ使節ヲ立ルニ決ス
廿六日九字岩公亭ニ參上今日參議一同會議官祿士族祿制ノ事及ヒ海

外生徒引取ノ一御評議幸士族祿制ニ一ハ先ツ祿稅ヲ賦シ候筋ニ決ス官祿稅モ同斷ニ海外生徒ノ處置モ惣體引揚クルノ義ニ決ス
廿九日今朝九時參朝 主上臨御兼內務卿直ニ拜命ス於 御前評議內地旅行ノ事魯西亞使節ノ一官祿稅華士族祿稅ニ事

【參考】其二 岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月朔日

(大久保家藏)

祿稅ニ事ニ付木戸余程議論有之旨伊藤心痛内話承リ候ニ付同氏貴公ニ直談可然申置候事ニ候木戸論も尤ニ存候就而夫既ニ御決定ニ事小生ニハ兎も角速ニ御發表有之度天下士卒而已ナラス凡而之人心大ニ定マルもの可有之一重大事件と存候事ニ候再議も有之候ハ、小生ニハ御評議初日申述十年又十五ヶ年間云々ニ處何國迄も可然存候事ニ候條御含迄申入置候間吳々も早く御落着ニ處奉懇禱候
久光卿進退ニ事ニ付厚ク御談し申度兩三日中可罷出候今日三條出會候間出仕否當人望ニ處ニ任セ候外無之と存候多分湯治可被參存候事

ニ候

右早々如此候也

十二月朔日

具 視

利 通 大 人

七五四 立憲政體に關する意見書 明治六年十一月 (伊藤公爵家藏)

【按】十一月十九日ノ閣議ノ結果工部卿伊藤博文外務卿寺島宗則ノ二人ニ政體取調掛ヲ命セラル本書ハ其ノ際利通ヨリ自己ノ意見ナリトシテ伊藤ニ示シ以テ參考ニ供セシメタルモノニテ伊藤之ヲ謄寫シ表紙ニ「明治六年大久保參議ノ起艸」ト自書セリ亦以テ利通ノ進取的抱負ヲ窺フニ足ルヘシ

世ノ政體ヲ議スル者輒ハチ曰ク君主政治或ハ曰ク民主政治ト民主未タ以テ取ル可カラス君主モ亦未タ以テ捨ツ可カラス然リ而シテ此政體ハ實ニ

建國ノ楨幹爲政ノ本源至大至高ナル者ナリ其體確立セサレハ則ハチ國何ニヲ以テ建タンヤ政何ニヲ以テ爲サンヤ

夫レ民主ノ政ハ天下ヲ以テ一人ニ私セス廣ク國家ノ洪益ヲ計カリ治ネク人民ノ自由ヲ達シ法政ノ旨ヲ失ハス首長ノ任ニ違ハス實ニ天理ノ本然ヲ完具スル者ニシテ目今合衆國瑞西蘭土其他南亞墨理駕地方ニ於テス此政體ハ創立ノ國新徒ノ民ニ施行スヘクシテ舊習ニ馴致シ宿弊ニ固着スルノ國民ニ於テハ適用スヘカラス瑞西蘭土ハ沃饒四塞天府ノ國ナリ一國ノ向背ヲ以テ歐洲ノ全勢ヲ輕重ス是ヲ以テ各國相軌シ相制シ敢テ之ヲ覬覦セス而シテ合衆國ハ建國未タ百年ニ足ラス當初君主政治ノ壓制ニ苦シミ民主ヲ以テ其國ヲ建ツ其餘皆ナ創立ノ國新徒ノ民ノ故ヲ以テ斯ノ政體行ナハル然レモ其弊黨ヲ樹テ類ヲ結ヒ漸次土崩頽敗ノ患モ亦測カル可カラス

往時佛蘭西ノ民主政治其兇暴殘虐ハ君主擅制ヨリ甚タシト名實相背ムクニ及ンテハ亦此クノ如シ是亦至良ノ政體ト謂フ可カラス若シ夫レ君主ノ

政ハ蒙昧無智ノ民命令約束ヲ以テ之レヲ治ムヘカラス是ニ於テカオカ力稍
衆ニ擢ル者其威力權勢ニ任カセ其自由ヲ束縛シ其通義ヲ壓制シ以テ之ヲ
駕御ス此レ方サニ一時適用ノ至治ナリ然レモ上ミ明君アリ下モ良弼アル
時ハ民其禍ヲ蒙ラス國其敗ヲ取ラスト雖モ猶内外ノ政朝變暮化百事換散
ノ弊ヲ免カレス若シ一旦暴君汚吏其權力ヲ擅マ、ニスルノ日ニ當リテハ
生殺與奪唯意惟レ行フ故ニ衆怒國怨君主一人ノ身ニ歸シ動モスレハ廢立
篡奪ノ變アリ其法政概ムネ人爲ニ出テ天理ニ任カセス此レ人情時勢ニ於
テ久シク持守ス可カラサルモノニシテ即ハチ英國「コロンウェル」及ヒ佛國
千七百年代ノ革命覆轍亦以テ徵スヘシ

抑政ノ體タル君主民主ノ異ナルアリト雖モ大凡土地風俗人情時勢ニ隨テ
自然ニ之レヲ成立スル者ニシテ敢テ今ヨリ之レヲ構成スヘキモノニ非ラ
ス亦敢テ古ニ據リテ之レヲ墨守スヘキモノニ非ラス魯國ノ政體以テ英國
ニ施行スヘカラスシテ英國ノ政體以テ亞國ニ用ユヘカラス亞ヤ英ヤ魯ヤ

其政體以テ我國ニ行フヘカラス故ニ我國ノ土地風俗人情時勢ニ隨テ亦我
カ政體ヲ立テサルヘカラスナルリ維新以來宇内ヲ總覽シ治ネク四海ニ通
シ我カ國ヲシテ萬邦ニ卓越セシメントス然レモ其政ハ依然タル舊套ニ因
襲シ君主擅制ノ體ヲ存ス此體ヤ今日宜シク之レヲ適用スヘシ而シテ土地
ハ萬國通航ノ要衝ヲ占メ風俗ハ進取競奔ノ氣態ヲ存シ人情既ニ歐米ノ餘
風ヲ慕ヒ時勢半ハ開化ノ地位ニ臨ム將來以テ之レヲ固守スヘカラスナルナ
リ然ラハ則ハチ政體以テ民主ニ歸ス可キカ曰ク不可辛未ノ秋廢藩ノ令下
リ天下漸ヤク郡縣ニ歸シ政令一途ニ出ツルト雖モ人民久シク封建ノ壓制
ニ慣レ長ク偏僻ノ陋習以テ性ヲ成ス殆ント千年豈ニ風俗人情ノ以テ之レ
ニ適用スルノ國ナランヤ民主固トヨリ適用スヘカラス君主モ亦タ固守ス
ヘカラス我國ノ土地風俗人情時勢ニ隨テ我カ政體ヲ立ツル宜シク定律國
法以テ之レカ目的ヲ定ムヘキナリ英國ハ歐洲ノ一島國ナリ幅員二萬五百
方里人口三千二百萬餘ノルマンデー・ウヰルアム入國以來僅カニ八百餘年

ニシテ國威ノ海外ニ振ヒ萬邦ヲ膝下ニ制シ今日ノ隆盛ニ至ル者ハ蓋シ三千二百餘萬ノ民各己レノ權利ヲ達センカ爲メ其國ノ自主ヲ謀リ其君長モ亦人民ノ才力ヲ通暢セシムルノ良政アルヲ以テナリ我日本帝國モ亦亞細亞洲ノ一島國幅員二萬三千方里人口三千一百餘萬

天智帝中興以來千有餘年ニシテ其英國ノ隆盛ニ至ラサル者ハ他ナシ三百餘萬ノ民愛君憂國ノ志アル者萬分有一ニシテ其政體ニ於テモ才力ヲ束縛シ權利ヲ抑制スルノ弊アルヲ以テナリ其國家ヲ負擔スルノ人力ト其人力ヲ愛養スルノ政體ニ從テ國家ノ以テ隆替スル所ロノモノ昭々此クノ如シ抑我カ

祖宗ノ國ヲ建ツル豈ニ斯ノ民ヲ外ニシテ其政ヲ爲ンヤ民ノ政ヲ奉スル亦豈ニ斯ノ君ヲ後ニシテ其國ヲ保タンヤ故ニ定律國法ハ即ハチ君民共治ノ制ニシテ上ミ君權ヲ定メ下モ民權ヲ限リ至公至正君民得テ私スヘカラス夫レ人々相交ハル時ハ人々相競フ君民相交ハル時ハ上下亦相競フ上下相

競ヒ相交ハルノ際ニ於テ是非曲直善惡邪正ノ分之レヲ裁決セサル可カラス其特權君ニ在ルヲ君主ト謂ヒ民ニ在ルヲ民主ト謂フ其君民共ニ之レヲ執ルヲ君民共治ト謂フ此レ上下各其公權通義ヲ保全暢達センカ爲メ君民共議以テ確乎不拔ノ國憲ヲ制定シ萬機決ヲ之レニ取ル之レヲ根源律法ト謂ヒ又之レヲ政規ト謂フ即ハチ所謂政體ニシテ全國無上ノ特權ナリ此體一トタヒ確立スル時ハ則ハチ百官有司擅マ、ニ臆斷ヲ以テ事務ヲ處セス施行スル所ロ一轍ノ準據アリテ變化換散ノ患ナク民力政權并馳シテ開化虛行セス此レ建國ノ楨幹爲政ノ本源ニシテ今日百般ノ務メニ從事スル者々茲ニ注意セスンハアル可カラサルナリ然リト雖モ今日此議ヲ建ツル乃チ天皇陛下ノ大權ヲ輕重スルヤ曰ク否夫レ天子ノ大權其ノ外貌益重モケレハ則ハチ其實權愈輕シ何ントナレハ則ハチ將門均ヲ乘ルノ日天子九重ノ内ニ在リテ威嚴堂々下民仰テ以テ神トナス而シテ天子尺寸ノ權ナシ一旦親カラ萬機ヲ裁スルニ當リテ下民始メテ天日ヲ拜シ至尊モ亦タ

斯人タルヲ知ル而シテ外貌ノ威半ハ損ス人情時勢ノ日ニ開明ニ赴ク水ノ濕ニ就クカ如ク物理ノ自然人力ノ支フル所ロニ非ス今ニシテ之レヲ察セス其外貌ノ大權ヲ強持セント欲セハ則チ天子坐ナカラ空器ヲ擁シテ昔時將門乗均ノ日ニ異ナラサルノミナラス天位モ亦將サニ危カラントス是ヲ以テ上ミ君權ヲ定メ下モ民權ヲ限ルモノハ蓋シ國家愛欲ノ至情ニ出テ人君ヲシテ萬世不朽ノ天位ニ安ンセシメ生民ヲシテ自然固有ノ天爵ヲ保モタシムル所以ンナリ然ラハ則チ今日ノ要務先ツ我カ國體ヲ議スルヨリ大且ツ急ナルハナシ苟シクモ之レヲ議スルニ序アリ妄リニ歐洲各國君民共治ノ制ニ擬ス可カラス我カ國自カラ皇統一系ノ法典アリ亦タ人民開明ノ程度アリ宜シク其得失利弊ヲ審按酌慮シテ以テ法憲典章ヲ立定スヘシ

治國ノ道タル其政府ノ體裁ニ於テハ各其國古來ノ風習人情ニ從ヒ或ハ立

君獨裁或ハ君民共治或ハ共和政治等ノ異ナルアリト雖國中百端ノ事務ヲ議定施行スルニ至テハ必ス獨立不羈ノ權ヲ有スル處有テ以テ斷然之ヲ行フニ非レハ衆論百出異說紛々終ニ定基ナク人々一己ノ私論ヲ主張シ着手方向ヲ裁リ施行順次ヲ失ヒ進マント欲シテ退キ急ナラント欲シテ緩ナルノ弊ヲ生シ國政不振基礎不立ノ憂ヲ致ス然而所謂三種ノ政體中立君獨裁トハ則國ニ從來ノ定法ナク只國君ノ意以テ之レカ國法ト爲リ其君權定限ナキ者ヲ云君民共治トハ從來ノ定規ニ從ヒ君民ノ間各其權限ヲ定メ以テ法ヲ立ツ君主之レニ因リテ自ラ國政ヲ理ムルモノヲ共和政治人民共治ト云シルヘニ至ツテハ人民相共ニ力ヲ盡シ以テ法憲ヲ定メ定ムル所ノ法憲ニ從テ國政ヲ理ムルノ人ヲ撰ヒ之レヲシテ國務ヲ奉行セシムル是レ也雖然各其不羈獨立ノ權勢ヲ有スル所在テ百端ノ國政ヲ裁決施行スルノ意ニ至テハ則チ一ナリ故ニ立君獨裁ノ國ハ君意ヲ以テ確然不可犯者トシ君民共治人民共治ノ國ニ於テハ定憲定法ヲ以テ確乎不拔ノ者トス今我カ政體ヲ

察スルニ自ラ此三者ヲ斟酌折衷スルモノニシテ能ク國風ニ應シ時勢ニ適
スルニ似タリト雖モ然レトモ實際ニ臨テ尙ホ適切ニシテ以テ弊ナシトセ
サル者アリ其故何ソヤ命令ノ出ル處實權ナク又隨テ一ナラサルニ因ルナ
リ之レヲ人身ニ喩フルニ手足動モスレハ恣ニ其好ム所ヲ行ヒ其欲スル所
ニ趨ルカ如ク既ニ其主宰ヲ失テ氣脉相通セス首尾相應セサルカ如シ故ニ
今深ク此ニ注意シ篤ク時勢ヲ量ツテ窃ニ左ノ擬議ヲ建ツ

太政官職制

太政官中三院一寮ヲ置ク可シ

正院 左院 右院

式部寮

此三院一寮以テ太政官ト名附クヘシ

正院

天皇陛下親臨

太政大臣

天皇陛下ヲ輔弼シ萬機ヲ統理シ諸上書ヲ奏聞シテ制可ノ裁印ヲ鈐シ且
勅書ニ署名鈐印スルヲ以テ任トス右院ニ在テハ之カ長タルヘシ

左大臣

職掌太政大臣ニ亞ク太政大臣缺席ノ時ハ其事務ヲ代理スルヲ得其右院ニ
在ルヤ參議ト共ニ全國百般ノ事務ヲ裁決施行スルヲ掌トル

大内史 其他略ス

左院

左右大臣或ハ參議ノ中チヨリ之レカ議長トナルヘシ

一等二等云々ハ諸立法ノ議事ヲ掌トル

右院

太政大臣之レカ長タルヘシ

參議

全國百般ノ機務ヲ商議判決スルヲ掌ル
式部寮云々

正院ハ 天皇陛下臨御シテ萬機ヲ總判シ太政大臣左右大臣之ヲ輔弼シテ
庶政ヲ獎勵スル所ロナリ

凡全國一般ニ布告スル制度條例及

勅旨特例ノ事件ハ太政大臣ノ名ヲ以テ正院ヨリ之レヲ發令スヘシ

諸省使寮司局ヲ廢立分合スル先ツ右院ノ商議ヲ經テ上奏シ允裁アレハ則
太政大臣ノ名ヲ以テ令スル正院ヨリスヘシ凡勅任官ノ進退ハ 宸斷ニ出
ルト雖トモ必先右院ノ商議ヲ經テ上達シ太政大臣之ヲ奏上シ允裁ヲ得テ
後テ進退スヘシ凡ソ奏任官ノ進退ハ其所轄長官ノ奏問ニ因ルト雖必右院
ニ於テ商議ノ上太政大臣之ヲ處置ス本院中判任官ノ進退ハ其所轄ノ具狀

ヲ得内史ヲシテ之レヲ處置セシムヘシ

凡ソ重大ノ訟獄ニ付其事情ニ差誤ヲ生シ裁判上過マツテ斷決スルモノア
ルトスルトキハ司法官其情曲ヲ具狀シ右院ノ商議ヲ經テ太政大臣之ヲ上
奏シ允裁ヲ得テ其罪科ヲ宥ムルトアルヘシ凡ソ一般ノ奏事ハ必ス先ツ
右院ノ商議ヲ盡シ判決シテ後テ主任ノ者ヨリ之レヲ正院ニ出タスヘシ然
シテ太政大臣之レヲ奏上シ制可ヲ得乃ハテ主任ニ付シテ施行セシムヘシ
議政行政ニ關スル諸文書法案及 勅書令條差除黜陟ノ記錄等ハ内史ニ付
シテ司掌セシムヘシ

恒例ノ公文既發ノ命令通常ノ達書等ハ外史ニ付シテ司掌セシムヘシ
凡ソ右院ノ議判ヲ經主任ヨリ允裁ヲ乞フ處ノ奏書ハ内史其部類ヲ分カチ
之レヲ本帖及副本ニ寫シ本帖ニハ右院議判者ノ名ヲ記シ内史又々之レニ
記名シ之レヲ太政大臣ニ出スヘシ太政大臣之レニ鈐印シテ 御批允裁ヲ
受ケ之レヲ主任ニ歸シテ奉行セシムヘシ内外史所屬ノ各局課式部寮等ノ

事務ハ各其主任ヲシテ管理セシム

左院

左院ハ諸立法ノ事ヲ議スル所ナリ
新ニ制度條例ヲ創立シ或ハ從來ノ成規定則ヲ増損改革シ及例規ナキ事件
ヲ新ニ考定スル等惣テ局中ノ衆論ヲ盡シ自カラ建議シ或ハ左院ノ下議ニ
依テ草案ヲ起シ之ヲ議定シ鈐印ノ上之ヲ議長ニ呈シテ右院ニ出スヘシ
左院ハ立法ノ主務ニ付充分擬議スルノ權アリト雖モ裁決ノ權ハ固ヨリ有
スル能ハス本院ノ議論ヲ經本院ノ鈐印有ル者ニ非サレハ直チニ右院ニ於
テ議判シ太政大臣ニ呈シ假令之カ允裁ヲ受クルト雖モ決シテ奉行スルコ
ト能ハサル者トス

議員ハ平常ト格外トノ兩員アルヘシ平常ノ員ハ常ニ此局ニ奉事スル者ヲ
云格外ノ員ハ諸省輔丞ノ内ヨリ撰擇シ其省ノ任務ニ關スル事件ニ付法案

ヲ起スコト有ルトキハ常ニ出仕參與スヘシ

明法寮ヲ以テ此内ニ付スヘシ

右院

右院ハ 天皇陛下太政大臣左右大臣參議及諸省ノ卿ニシテ參議タル者ニ
特任シテ諸法案及事務ノ當否ヲ商議シ定論ヲ立テシメ太政大臣ヨリ之ヲ
奏上セシムル所ナリ若シ最重大ナル事件ヲ商議スルニ當リテハ時機ニ依
テ

天皇陛下親臨スルコトアルヘシ

諸奏事及諸般ノ布令等皆ナ已ニ右院ノ判決ヲ經ルニ非サレハ太政大臣ト
雖モ決シテ直チニ奏上允裁ヲ受ケ奉行スルコト能ハス凡ソ諸般ノ事務ニ
於テ列坐相共モニ商議判決シ鈐印シテ同意ヲ表スル上ヘ其事務ノ主任誰
レタルヲ論セス連印ノ員ハ皆ナ均トシク其責ニ任スヘシ

右院中二三ノ書記官ヲ置キ日々當直ノ參議若シ左右大臣ノ兩人在ルトキハ右大
臣ヲシテ常ニ院中ノ長タラシムルモ
可ナランカ又然ラスシテ參議ノ他省ノ兼務ナキモアラハ其人右院ヨリ其ノ日ノ議
ノ事ヲ任シテ可ナランカ然ルキハ別ニ當番ヲ立ツルニ及ハサル可シ

事及ヒ談判ノ大意ヲ書記ニ下付シ之レヲシテ簡明ニ簿記セシメ置クヘシ
立法行政司法ノ三件ハ各一種ノ事務ニシテ自ラ區別アリ其所任ニ至リテ
モ亦區別ナキコト能ハス若シ之ヲ一手ニ司リ法ヲ立テ政ヲ行ヒ司法ノ權
ヲ有スル時ハ其事務大ニ煩亂シテ之ヲ反覆討論深思熟慮スルコト能ハス
良法ヲ立テ克ク之ヲ處分シ又諸件ノ定法ニ合スルヤ否ヲ決スルニ暇ナク
自然處事倉卒ニ出テ百弊竝ヒ生スルヲ免レス加之此三大權ヲ一處ニ任ス
ル時ハ或ハ其威權ヲ逞フシ私意ニ任セテ法制ヲ妄立シテ其權理ヲ意トセ
ス恣マ、ニ衆人ヲ奴視シテ敢テ其疾苦ヲ顧ス全國ノ利害ニ關セスシテ特
ニ一己ノ情慾ヲ專ニセンコト有ラントス於是乎歐洲各國多年ノ實驗ヲ經
テ久シク政學ニ力ヲ盡セシ所ノ國ニ於テハ此三大權ヲ區別シテ各其職掌

ヲ制限シ法規ヲ立テ、以テ各自ノ權限ヲ定メ互ニ相守リ毫モ干犯セシム
ルコトナキヲ要ス是レ其政務ノ本原ニ基キ其機軸ヲ定立セル者ニシテ蓋
政體上ニ於テ其法ヲ得タリト謂フ可シ是故ニ我國現今ノ形情ヲ見將來ノ
事勢ヲ察スルニ早ク此體裁ニ注目シテ政憲ヲ定ムルニ非レハ果シテ政體
ノ善美ヲ得タリト云フヘカラス雖然今此體裁ニ倣ヒ治國ノ三大權ヲ區分
シ互ニ相干犯スヘカラストモ未タ實際ニ於テ果シテ行ハル、ヤ否
ヤニ至リテハ實ニ豫メ言ヘカラス故ニ目度ヲ茲ニ期シ將來ヲ慮ツテ左ノ
擬議ヲ建ツ

議政

議院之レヲ掌トル一切議事ノ綱領ニ掲クル所ノ者ヲ議スルニ止マリ直
チニ之ヲ施行スルヲ得ス
國憲ニ基キ議則ニ據リ重大ノ事件ヲ議シ議決スルモノヲ太政大臣ニ付

シ奏聞シテ親裁ヲ乞フモノトス

行政

各省使府縣之レヲ掌トリ直チニ一般ニ施行ス

特權ヲ以テ太政大臣ノ奏スル所ヲ親裁シ直チニ之レヲ施行ス

國憲ニ基キ議院ノ議ヲ經テ已ニ制可スルモノヲ施行ス

天皇陛下ノ權

一 國政ヲ執行スルニ無上ノ特權ヲ有ス

一 皇統ヲ禪ル

一 親ヲ勅任官ヲ黜陟ス

一 全權公使ヲ派出ス

一 特典機密ノ使ヲ海外ニ派遣ス

一 議會ヲ聚散ス

一 議院ノ議全國ニ障礙アルトキハ其議ヲ廢ス

一 法律ノ撰定ヲ議院ニ下ス

一 師ヲ與シ師ヲ罷ム

一 政事上ノ過失ニ關セス

一 一般法律ノ羈束ヲ受ケス

一 訴訟ノ被告トナラスト雖モ裁判官ニ特命シテ之レヲ聽カシムルコト有ルヘシ

一 謀叛不軌ノ徒ヲ除クノ外裁判擬決ノ後特典ヲ以テ死罪ヲ宥タム

一 賞罰

一 爵位ヲ與奪ス

一 新タニ華族ヲ置ク

一 諸族ノ名稱ヲ與奪ス

一海陸軍及ヒ城砦軍艦兵器ノ類ハ一切之レヲ管ス
但卿兵ヲ親管ス

一尺度量衡ヲ定ム

一皇族ヲ管理ス

一我臣民ノ派出ヲ禁シ外國在留ノ我臣民ヲ召シ又タ我臣民ヲ海外ニ放逐ス

一外國人民ヲ我生民ト同視シ之レヲ使用ス

一外國人民ニ免狀ヲ與フ

議政院

華族及ヒ特命選舉ノ議員並ニ行政諸省ノ卿ヲ集會シ國憲ニ基テ重大ノ事務ヲ議セシムル所ナリ

職制

長官

一ノ議員ヲ議員中ヨリ投名ヲ以テ選舉シ院中ノ事務ヲ調理ス
國憲ニ基テ議事ヲ整齊シ議員ヲシテ議則ヲ確守セシメ行政ノ事務ニ關涉スルナシ

議員ヲ選舉スル概規

一華族ノ戸主二十一歳以上ノ者議員ヲ選舉スルヲ得ル
一議政院議員ハ華族選舉スル所ノ華族議員二十名其他 天皇陛下ノ特命ヲ以テ選舉スル所ノ議員ハ定限ナシ及ヒ行政諸省ノ卿ヲ以テ議員トス此レ亦 陛下ノ特權ナリ
一華族選舉ノ議員ハ罪アルニ非ラサレハ 陛下ノ特權ト雖モ其職ヲ免セス

一初メ滿二ケ年ニ至レハ華族選舉スル議員並ニ特命選舉ノ議員其半數更

ニ新選ヲ以テ之レヲ變ヘ置ク残り半數ハ滿三ヶ年ノ後又之レヲ變ヘ置ク

一特命ヲ以テ選舉スル議員華族ノ外奉職中ハ官給ヲ賜フ

議事ノ綱領

一歳出入ノ額ヲ議定スル事

但概算ハ大藏省ニ於テ擔當調査シ其法案ヲ正院ニ於テ通議審定シ然ル後議政院ニ出スヘシ

一既定ノ稅額ヲ増減變更スル事

但非常ノ天災及ヒ不得已ノ事故等ニテ一歳ノ收入豫算ノ額ニ滿タサルトキハ更ニ之ヲ償フ方法ヲ議定スル事

一新タニ諸租稅ヲ賦スル規則ヲ議定スル事

一諸法律ノ稿案正院ニ成ル者ヲ議定スル事

一諸會社一般ノ條例定規ヲ議定スル事

一貨幣鑄造ノ方法及ヒ其品量ヲ議定スル事

一金券ノ發行償却ノ方法及ヒ其規則ヲ議定スル事

一内外ノ國債ヲ募リ及ヒ之レヲ償却スルノ方法ヲ議定スル事

一兵員ヲ増減スル事

但非常ノ事アルニ臨ンテハ

陛下ノ特權タル事

一帝王ノ許可ナクシテハ本院ノ議定ハ一般ノ法トセサル事

但一旦議決スル者上奏シテ不可ノ令アル者ハ本年ノ會集ニ於テ再ヒ之レヲ議定スヘカラサル事

一本院ニ於テ議スヘキ事件ヲ本院ニ出サスシテ大臣直ニ陛下ニ奏聞シ

一般ヘ公布スルトキハ之レヲ拒ムノ權アルヘシ

【参考】其一公爵伊藤博文談話明治六年制度取調之件

(伊藤公全集)

明治六年使節一行ガ歐羅巴カラ歸朝シテ、征韓論ガ破裂スルト、政府ノ有力者ハ二ツニ分レテ、一半ハ朝ニ留マリ一半ハ野ニ下ツタ、ソノ時朝ニ殘ツタ人達ハ陣容ヲ立直シテ庶政ノ革新ニ努メテ居ルト、明治七年一月ニナツテ曩ニ征韓論ノ故ニ辭職シタ副島板垣ナドカラ、民選議院ヲ起セト云フ建白書ガ出タ、トコロガ、コレヨリモ前ニコレニ類スル新制度ノ計畫ニ就イテ意見ヲ持ツタモノガ政府部内ニモアツタノデア、ル、木戸公ハ明治六年七月歸朝スルト間モナク、歐米ヲ視察シテ得タ新知見ニ據ツテ、政規典則制定ノ議ト云フモノヲ發唱セラレタ、政規トイフノハ、今デ言ヘバ憲法ノ様ナモノデアツタ、大久保公モ大體同ジヤウナ意見デ、明治六年九月、私ガ岩倉大使ニ附イテ歸朝シテ、制度調査ノコトヲ仰付ケラレルト、大久保大藏卿ハ憲法制定ニ關スル意見書ヲ認メテ送ツテ寄越サレタ、其書面ハ今モ尙保存シテ居ルガ、殆ント一冊ニモナラウトスル程ノ浩漭ナモノデ、其大要ハ今茲デ文章ヲ表ハスコトハ

出來ヌガ、凡ソ斯ウ云フモノデアツタ

世ノ政體ヲ議スル者即チ曰ク君主政治民主政治ト、民主政治尙未ダ採ルベカラズ、君主政治亦タ棄ツベカラズ、然リ而シテ此ノ政體タルヤ、實ニ建國ノ大本、爲政ノ本源ニシテ至大至公ノモノタリ、其體確立セザレバ國何ニ依リテ立タンヤ、政治何ニ依リテ爲サンヤ、維新以來宇内ヲ總攬シ四海萬邦ニ卓絶セントス、然ルニ其ノ制ヤ依然舊套ヲ因襲シ、君主專制ノ體ヲ存ス、此制宜シク用ヒルベカラズ、然ラバ則チ民主制ト爲スベキカ曰ク不可、我國人民久シク封建ノ壓制ニ慣レ習性トナルコト殆ント千年、此風俗人情ヲ以テ俄カニ民主政治ヲ用ヒルベカラズ、君主政治モ亦固守スベキニアラズ、云々

文章ハ長イケレト、精神ハ略、右ノ様ナモノデ、碎イテ言ヘバ、憲法政治ハ今遽カニ實施スル譯ニハユカヌケレト、詰マリハソレニナラナケレバナラス、憲法政治ヲ施イテ國ヲ立テ、行カウト云フニハ、各國ノ政體ヲ

見テモ君主トカ、民主トカ、ツレノ形體ガアル、ケレモ、要スルニ、其ノ國其ノ時ノ人情風俗ニ據ツテ基ヲ立テタモノデアアル、舊ニ由ツテ之ヲ墨守シテ行クコトハ國ヲ保ツ所以デ無イ、我國ニ於テモ時勢、風俗、人情ニ循ツテ政體ヲ建テナケレバナラヌ、維新以來宇内ヲ總攬シ、治ク四海ニ通シ萬邦ト並立スルノ方針ヲ執ツテ來タケレモ、其ノ政治ハ依然タル舊套ヲ固執シ、專制ノ體ヲ存シテ居ル、此ノ體タル今日ニ在ツテハ、之ヲ用ヒザルコトヲ得ヌ、纔カニ藩制ヲ廢シテ郡縣トナシ、政令一途ニ出ヅルコト、ナツタガ人民ハ久シク封建ノ壓制ニ慣レ、千年ノ久シキ之レガ習性トナツテ居ルノデアアルカラ、急劇ナル變動ヲ之レニ與フルコトハ勿論國ヲ保ツ所以デナイ、併シ將來ニ期スル所ハ我ガ人情、風俗、時勢ニ循ツテ立憲ノ基ヲ樹ツルコトデナケレバナラヌトイフノデアアル、詰リ、漸進主義ノ立憲政治論デアツタ、世間ニハ大久保公ヲ目シテ壓制家ノ様ニ思フ者モアルヤウダガ、ソレハ甚ダシイ間違ヒデアアル、大久保

公ハ早クヨリ立憲政體ヲ主唱サレタ有力ナ一人デアアル、其頃封建制度ヲ廢シテ、王政復古トナツテ、マダ間ノ無イ所へ、今度ハ憲法政治ヲ持ツテ來ヨウトイフノデアアルカラ、具合ガナカノ六ツケ敷イ、勤王論ト憲法政治トノ關係ヲ明瞭ナラシメルニハ憲法ノ力ニ俟タナケレバナラヌ、大久保公ノ意見モ詰マリ、君權ヲ定メテ民權ヲ限ルト云フニ在ツタ、私モ此ノ事ハ輕々シク遣ツテハイカヌト云フコトヲ木戸公ト論ジタ、ソノ後ニナツテ、明治七年前ニ話シタ民選議院ノ建白モ出ルシ、十四年ニハ大隈伯ノ建白モ出來タ、ケレモ、イツレニシテモ、マダドウモ研究ガ足ラヌ、政體ヲ定メルト云フコトハ國體ニ關係ヲ持ツノデアアルカラ、十分ニ過去ヲ明カニシ、將來モ慮ツテ、コレナラバ慥カニ日本ニ適シ國家ヲ利スルト云フ安心ノ出來ルマデハ私モ容易ニ左袒シ得ラレナカツタ

【參考】其二子爵青木周藏談話

卷二十五 (明治六年十一月)

(大久保利武筆記)

二百七

明治五年岩倉大使歐米巡回ノ時ニ、大久保サンモ木戸サント共ニ副使トシテ行カレタ、予ハ當時獨逸ニ留學シテ居ツタガ、其際大久保サンヤ木戸サン達ノ勉強ハ實ニ感シ入ツタモノデ、先進國ノ文物制度ヲ熱心ニ研究ナサレタ、又到ル處デ留學生ヲ呼ビ寄セテ、ソノ取調ヲ命ジタリ意見ナドモ徵サレタガ、就中憲法ヤ行政組織ナドニハ最モ注意ヲサレタヤウニ思フ、獨逸ノ有名ナル政治家「スタイン」ハ、十九世紀ノ始メニ先ツ市町村制ノ改革ヲ斷行シタガ自治制ガ充分確立セラレテカラ數十年ヲ經テ始メテ憲法發布トナリ立憲政治ガ出來タコレラノ沿革ヤ英國立憲政治ノ圓滑ハソノ自治制度ノ完備セルニ基ツク等ノ所以ヲ詳細ニ研究サレタノデアアル、當時我邦ニテモ民選議院ノ論ガボツボツ起リカケテ居ツタカラ立憲政體ノコトハ早晚政府ニ於テモ實施スル積リデ、歐米諸國ノ政體政治ヲ研究サレタノニ外ナラナイ、サレバ大久保サンハ、自治制度ニ關スル取調ベテ諸員ニ命ゼラレタガ、ソノ考ハ我國

ノ立憲政治モ、亦外國ノ實例ト同ジク、先ツ地方自治制ノ確立ヨリ始メナケレバナラナイ、ソノ方法ハ漸進主義ニ依ルヲ可トスルト定メテ居ラレタ様デアアル、ソレ故歸朝サレルト間モ無ク大久保サンノ建議デ内務省ガ創設セラレ、續イテ地方官會議モ開カレ、尋イデ府縣會規則ヤ地方稅規則ヤ郡區町村編制法ナドノ制定トナツテ地方ノ民費ハ悉ク府縣會ノ議ヲ經テ徵收スルコト、ナリ、漸ク町村ノ自治ガ確立セラレル順序ニナツタ、然シ惜シイコトニハ木戸サンモ大久保サンモ前後シテ此ノ世ヲ去ラレタノデ、政府ノコノ方針モ民論ノ爲メニ却ツテ動搖スルニ至リ、遂ニ憲法モ地方制度モ僅カニ數年ヲ隔テ、實施サレルト云フ風ニ順序ガ前後シテシマツタ、今ニ至ルモ地方自治制ヤ憲法政治ノ運用ガ巧妙ニユカナイト云フノモ、畢竟コノ理由ニ基ヅクカラデアアル、兎モアレ私ハ大久保サン達ノ歐羅巴巡回中ノ熱誠ヲ思ヒ出シテ止マナイ、

【参考】其三伊藤博文より木戸孝允への書翰明治六年十一月廿一日

(木戸侯爵家藏)

昨日申上置候政體變制之御高案廉書御送被下難有拜讀仕候唯今は諸彦之高説を集合仕候て如何程之變革實際上に被行可申乎寺島氏と商議仕見其上にて公然取懸可申心得に御座候最初私一人專任にて諸學士其外實務熟達之士を撰ひ總轄衆議を盡し撰定仕候ては如何と大久保氏杯之按も御座候處兎ても其任に非すと自承知仕候に付寺島を重に擔當爲仕先つ下組を致置候て終ニは可なり之體裁出來可申乎否を見出し可申と奉存候高論之如くとても充分なる事は出來不申人民之賢愚は暫く差置役人之智恵も人情世態に適するや否を見るに足り不申實恐悚に不堪候大久保氏之論に此取調には福澤諭吉杯も組込候之は如何と申見込も御座候處私は更に不同意無之至極宜敷候得共是等之人物を組込候時は必ず其人之識見と道理を以て論し候事は政府に於て不採用は却て其人をして望を失せしむる之憂を生すへき乎制度

上姑息論無之眞に實際に適し道理にも不悖丈け之根法を取建可申一同之はまり込なればよろしかるへきと存候御高案如何何事も寺島と熟議仕候上又御高案に付ても御返答可申上様可仕候不取敢御答如斯御座候拜具

廿一日

博文

木戸公閣下

七五五 岩倉公への書翰明治六年十二月七日

(岩倉家文書)

【按】久光公への示諭ニ關シ注意ノ件ヲ言上セシモノナリ
過刻久光云々之義拜承其節申上候合之處別御差急故申上殘候同人は極内御示諭ニ付亦ハ決亦一人限リニテ服心之者タリトモ口外スヘカラス子細ハ従前政府之機密漫ニ漏洩大ニ不都合ヲ生シ且體裁上ニ於テ大ニ不宜此節政府上ニテ堅ク誓約イタシイカ様無餘儀情實アリトイヘトモ破約イタスマシキト申合候次第ニ就中人撰ノ事ハ重大之事ニ付此義御内話申

上候モ貴卿ハ國事御諮詢云々有之事故別段也不本意ナカラ不得止申上ル
事ナリ由テ其道理ヲ御了察千萬御心得有之度云々トノ御旨趣分テ御示諭
奉願候實ハ正直ナル性質故此内ヨリ度々ノ御應答ノ形行ハ奈良原等へモ
不申聞候由ヨホト心ハ用居ルト被察奈良原モ其邊ハ大ニ宜シキ事ト申居
候爲御心得此段申上候拜首

十二月七日

利通

視公閣下

【解説】是レヨリ先キ久光公ハ建白ノコト容レラレサルヲ理由
トシテ歸國ヲ請ヒシカ極力岩倉公ヨリ示諭スルトコロアリ更
ニ公ヲ内閣顧問ニ任シ國事諮詢ヲ仰セ付ケラルヘキヲ以テ利
通ヨリ特ニ注意スヘキ點ヲ述ヘタルナリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰明治六年十二月七日
先時差置御書狀一見何も令承知候

赤坂參入之處御用有之不得

御前空敷引取り彼云々御決答ハ不伺候得共尙又德卿示談之處迎も御
六ヶ敷御様子被伺候就ハ同卿よ々と心配自分進退云々被申聞候
得共小生再ヒ否申入候迄從前之通りと申置候右ニ付即時老卿方行向
云々申入候處決而無子細承伏ニ候但シ來春ニも相成候へハ云々トノ
件々申入置候是ハ小生素リ御咄し申入候通り今日之處不得止ニ出候
得共天下ニ對^ト候も不忍事と存候依而先御安心之方と一筆申入候
○祿税之事○陸軍卿之事○海外生徒之事○魯國使節人體之事
右等ハ速ニ御心配被下御決定不相成候ハ天下ノ^レモ去リ可申と存
候殊ニ祿税ノ義第一差急キ候譯と存候凡ノ目途附候處ニ而明後夕ニ
而も小生邸集會如何ニ哉明夕明後早天之中貴卿面談萬事申承リ度存
候元ヨリ無御助才存候得共精々御盡力可給候早々以上

十二月七日

具 視

七五六 岩倉公への書翰

明治六年十二月八日

(岩倉家文書)

【按】政務ニ關スル公ノ諮問ニ答ヘタルモノナリ

昨夜ハ尊書被成下敬讀仕候昨日赤坂

皇居に御出頭之處云々之御都合ニ直様久光公に御行向御示諭被爲在同人も無異議承伏仕候由大に安心仕候同人に御直談よて許諾仕候上ハ以下之處よて如何様よ申立候も決る御執合無之何も氣遣之義無御坐候且又陸軍卿進退之事課税之事魯公使之事海外生徒之事等之數件速に御決着無御坐候もハ不都合与之御旨趣御尤ニ奉存候海外生徒之事ハ此内ハ西郷に談置山縣よて異論有之候得共此義ト是非承知無之候もハ不相濟旨申入置候處左様之譯に候得ハ無致方候付是迄兵學校検査を經る出ル者并ニ陸軍省に取調之名目を以出ル者を除ク之外ハ惣に引取被仰出候も宜舖趣返答

承候付今日ハ前條申上度存候得共御差急キ御退出之事故差扣罷在候其餘之事件ハ今一應御評議有之可然乍去其内拜趨猶又御内談可申上候明朝ハ差支之儀御坐候与からハ今夕退出懸ケカ或ハ六字後ニも御都合次第參上可仕候願クハ一度御評決之事ハ速に實地之運相付候様いたし度ものニ御坐候兎角日を経月を重ねるニ從ひ何となく相弛ミ是迄之轍を踏ミ候姿ニ相成歎息之至ニ御坐候何事も此機會よ乘し政府之御旨趣判然民心ニ徹し耳目を改候様無之を不測之變を醸スも圖ル可らば厚御熟考可被成下候明後十日午後集會御催有之候も可然与奉存候横須賀行幸等も被爲在候得ハいつのまより此年の月日も去り可申候此段拜復旁艸々如此御坐候敬白頓首

十二月八日

利通

具視公閣下

七五七 西德次郎への書翰 明治六年十二月九日

(西男爵家藏)

【按】魯國留學中ノ西へ贈リタルモノニシテ同國在勤ヲ命セラレシ花房義質ニ托セルナリ

拜啓追々寒氣相向候處先以御安固被成御勉強候筈奉賀候次より小子歸朝已來碌々在職仕候間乍餘事御放慮可被下候

一兼而相願置候魯國政體取調御出來木戸氏便ヨリ御送被下難有落手仕候篇与熟覽仕候處格別御骨折被下候半當分政體御取調中大より參照スヘキモノ有之有益相成候右厚御禮申上候

一度々御投翰殊より新聞且御賢考之御書面等御送り被下逐一拜見御尤至極ニ奉存候御答書早速可差上處彼是紛雜より其儀不相調甚背本志偏ニ御宥恕所仰候猶乍此上新聞等ハ時々御示シ可被下候此節公使館被設候付今后ハ便利可相成候付致懇願候

一御國形勢も歸朝後大ニ相變シ多分最早新聞等ニ而御承知有之候半与相

察候委曲ハ中々筆墨之及處ニあらば此節幸より花房并ニ中村等被差出候付何も御直ニ御承知可被下候一旦ハ如何可相成行や与別而懸念も有之候得共先追々と折合も相付候間爾來と格別之儀も有之ましく候半ト安心仕候乍去此上之處を政府上ニ而道理を盡ス而已より有之乍不及勢之及處丈ハ鞠躬可仕格護ニ御坐候

一樺太々少々混雜之儀有之今度取調之爲外務省官員并より魯公使書記官開拓方官員出張立會よて取糺候處凡魯人之暴舉タルヲ相分り出張裁判官の惣轄裁判所へ處置振伺越候由より御坐候御地よて何様之批評も候や此義判然タル處分無御坐候而ハ中々全國人心折合付兼候場合ニ御坐候間精々事情探索早便より御申越可被下候此一條も細事ハ花房等が御承知被下候得ハ判然相分り可申候

右任幸便御禮答旁如此御坐候當分繁務ニ而何も細筆ニ能はば候も不惡御汲量可被下候拜答

明治六年十二月九日

大久保利通

西 德次郎様

尙々甚粗品ニ候得共御禮旁一包致進上候間御笑留可被下候吳々御地事情精々御探索之上時々御洩し可被下候

【解説】魯國政體取調書ハ利通カ曩キニ歐洲巡遊中ニ依頼セシモノニテ其後西ハ右調書ヲ同國ヨリ歸朝ノ途ニ就ケル木戸ニ托シテ送附セルナリ

七五八 岩倉公への書翰 明治六年十二月十七日

(岩倉家文書)

【按】行幸地へ史官差遣ノコトニ付キ公ノ書ニ答へタルモノナリ

拜讀仕候然々今朝來烈風ニ付史官よても御伺トシテ可被差出与之趣奉畏候乍去此位之風よて奉懸念候程之事ハ決有御坐ましく与大木とも申談

候事ニ御坐候まかし御差出相成候得ハ御念之譯ニ候間此上と無御坐候御差出し之方可然与思食候得々異議と無御坐候間今一應被示聞候ハ、則史官之内御宅に差出候様可仕候横濱迄出候得ハ模様ハ相分可申候間彼地の時宜ニ應し候亦可然此旨拜復如此御坐候拜首

十二月十七日

利通

具視公閣下

尙々伊藤ハ工部省へ出席不參之旨申來候間御書翰ハ差廻申候也

【解説】是日 聖上皇后横須賀ニ行幸シ給ヒ造船及製作工場ヲ巡覽アラセラル當日ハ朝來烈風吹キ天候險惡ナリシヲ以テ岩倉公ハ或ハ行幸ノコト延期トナランカトテ史官ヲシテ伺候セシメントシタルナリ

七五九 岩倉公への書翰 明治六年十二月十九日

(大久保利武藏)

【按】陸海軍省生徒及ヒ北海道殖民等ニ關スル公ノ諮問ニ答ヘタルモノナリ

尙々昨日土方の申達置候付則御廻申上候事与存尙又可承候處同人今日ハ司法省出席不參ニ付相分不申候付若相廻リ不申候ハ、早々土方懸合候様可仕候

拜讀仕候海陸兩省生徒之事既ハ陸軍省ハ過日差出候付判然相分居候海軍省ハ昨日史官の差出候由土方の申出候付神速閣下の御廻申上候様申入置候付御落手相成候事与奉存候此義別段兩省打合ニハ及不申与愚考仕候

一黒田の申立北地植民一條ハ凡見積書過日差出有之候付彌五千人移住被仰付候ニ決定候ハ、先伺之通被仰付候旨御指令相成候可然其上委曲之方法ハ取調差出させ可然概略五千人を三ヶ年ニ移住させ其費用六十萬圓之積与存候左候得ハ一ゝ年二拾萬圓ニ及可申候黒田の建白候趣

意ハ大藏省の借入金百四拾萬圓年々元利拂戻相成候株を其まゝ据置植民并ニ軍艦之方ニ振向度与之趣ハ候得共云々申立之趣ハ御採用難相成五千人植民之儀の申立通被仰付候付費用之儀別途ニ御渡可有之尙精細方法取調可申出与御達ニ宜舖与奉存候右黒田之書面御手元有之候ハ、今一應拜見仕度御坐候

右拜答のミ如斯御坐候頓首

十二月十九日

大久保利通

具視公閣下

尙々定而御承知被爲在候半鹿兒島分營去ル七日焼失之由昨日電報有之未委細之儀と相分不申候序ニ申上候

【解説】海陸兩省生徒云々ハ陸海軍兩省ニ對シ海外留學生ノ現人數ヲ上申セシメタルモノ北地植民一條ハ黒田開拓次官ヨリ建白ニ係ル屯田兵設置案ニシテ先ツ五千人ヲ移住セシムルコ

トニ決シコレカ指令ニ付キ意見ヲ具申シタルナリ

【参考】其一岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月十九日 (大久保家藏)

鹿兒島分營燒失之由尙事情御聞候ハ、早々爲御知可給候

先時答書之處來人中失禮

海陸兩省生徒書取昨日河村ヨリ差出候旨ニ亦土方ヨリ正ニ請取申候處少々分リカネ候處有之候故今朝同人招キ寄示談致シ候尤兩省打合候事ニ無之陸軍省書取モ誠ニ先日御傳之分草而已故判然爲認候爲メト召返シノ内壹人殘心ト存候者有之其子細承リ度旁以西郷申遣候事ニ候黒田申立之事來示之通承知罷在候得之段々延引故最早海軍省申出ヲ不待黒田ハ殖民云々御示ノ通り取調差出候様御申達可然存候丈ニ亦申入候事ニ候黒田申立書類ハ河村所持故今日取ニ御遣シ可給候尙委曲ハ明日朝ノ内細敷可申入ト存候早々如此候也

十二月十九日

具 視

大久保殿

(開拓使日誌)

【参考】其二黒田清隆建言書 明治六年十二月

北海道及樺太ノ地ハ當使創置以來專ラ力ヲ開拓ニ用ヒ未タ兵衛ノ事ニ及ハス今ヤ開拓ノ業漸ク緒ニ就キ人民ノ移住スル者モ又隨テ増加ス之ヲ鎮撫保護スル所以ノ者無カル可カラス況ヤ樺太ノ國家ノ深憂タルハ固ヨリ論ヲ待タス故ニ今日ノ急務ハ軍艦ヲ備ヘ兵衛ヲ置クニアリ抑モ管内ノ鎮臺ノ設ケ自ラ府縣ノ法ニ准シ施行アル可シト雖モ其全備ヲ求ムレハ費用甚タ鉅ナリ容易ニ辨スヘキニ非ス今略屯田ノ制ニ倣ヒ民ヲ移シテ之ニ充テ且耕シ且守ル時ハ開拓ノ業封疆ノ守兩ナカラ其便ヲ得ン因テ其費用ノ出ル所ヲ計ルニ當使嚮キニ大藏省ヨリ借ル所ノ金百四十五萬圓アリ其内本子合五十三萬四千八百圓餘已ニ辨償セシ外本子尙百十八萬二千六百七十圓餘アリ明年ヨリ三年間ニ當使定額金ノ中ヨリ辨償スヘキ者ナリ今之ヲ移シテ其費ニ充テ五

十萬圓ヲ以テ軍艦一隻ヲ外國ヨリ購入シ之ヲ海軍省ニ付シ專ラ北海道ノ用ニ供シ舊館縣及ヒ青森酒田宮城縣等士族ノ貧窮ナル者ニ就テ強壯ニシテ兵役ニ堪ユヘキ者ヲ精選シ舉家移住スルヲ許シ札幌及小樽室蘭函館等ノ處ニ於テ家屋ヲ授ケ金穀ヲ支給シテ產業ヲ資クル別紙ニ載スル所ノ如クシ非常ノ變アレハ之ヲ募テ兵ト爲ス時ハ其費大ニ常備兵ヲ設クルニ減シ且ツ以テ土地開墾ノ功ヲ收ムヘシ豈ニ至便ナラスヤ封疆ノ守人民保護ノ道一日モ忽ニス可ラサルヲ以テ敢テ建議奏請ス夫レ非常ノ事固ク非常ノ斷ニ非サレハ成ル能ハス今日ノ議實ニ已ムヲ得サルニ出ツ豈尋常成規ニ拘泥スヘケンヤ伏シテ乞フ特例ヲ以テ速ニ允裁ヲ賜ヒ大藏省ニ下命アラン事ヲ 清隆 頓首再拜謹言

七六〇 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿日

(岩倉家文書)

【按】官祿税ノコト及ヒ時務ニ付キ公ノ諮問ニ答ヘタルモノナ

尙々今朝來客人有之御返詞延引仕御宥恕可被仰付候

拜讀仕候未御所勞御全快無之今日迄ハ御參朝不被爲在候由折角御保養此節柄一日ニ亦も速ニ御參被爲在候様奉祈候

一條公御書拜讀則返上仕候廿二日御出仕相成候由無此上御都合与奉存候一官祿税祿税之事ハ是非并行之を以候候ハ不可然此儀ハ厚御熟考奉願候若一般ニ官祿税被行兼候事ニ候ハ、過日も御内話申上候通條公与御談合ニ當節炎上已來御災難其上内外不容易折柄海陸軍も實地ニ御着手可有之与之御旨趣ニ有之旁御黙止るべき御衷情を以十分之一位よても御獻納被爲在候様所願ニ御坐候左候得ハ小臣もおひて去則御同様奉願度御坐候今日祿税ニ御着手御坐候得去官祿之儀ハ無論ある事ニ候處何故ニ是ニハ異論多ク候や小臣ニハ了解仕兼候外國よても無之譯よてめ

つゝは此官祿税を懸若外國人之笑を招き候るゑ甚不宜与之事過日議論も有之候付則取調仕候處現在即今ニ被相行候儀ニ而外國ニあき事与ハ不被申候過日伊藤に取調爲見候處官祿税之事ハ固より強而論かしとの事ニ御坐候又姑息と何与の申説も可有御坐候得共今日之政寸毫姑息も交えに被相行候事ニ候や是又得手勝手之論ニ可有御坐候小臣ニ於るハ何も非難する道理も無御坐候与存詰候別番伊地知之取調書爲御心得入御内覽候小臣勘考よりまゝ甚しく御坐候仍る今日之條公御出會被爲在候ハ、厚御談合被成下候様爲國家涕泣至願仕候抑今日之形勢四方人心恟々タル事之固より御承知之通よて今日ニ行懸り候原因又不容易凡來陽二月頃迄は國家維持之成否相分可申与窃は相考候其着手順序を不誤候得と何も憂るゝ足らに候得共若一步を違へ候得と終ゝ不可救之時宜ニ立至り候事ハ明鑑ニ懸タル如クニ御坐候近衛兵云々之節是非一刀兩斷先スルノ論申上候事と于今御心ニ認めらる候筈与奉存候其節大ニ

謀らんと不可然与之御論よて不得止屈伏仕候とあるよ今日之有様よてハ皇威愈不相振政府何事をあつて數日を費し候や俯仰實は愧へき之至ニ御坐候動モスレハ坐論といえるものハ實地を末よして道理を本よスル故必事上よ疎ク其弊全國よ及んてと詰て天下之大患与相成候事ニ御坐候幾重よも御熟考奉願候

一大隈依願買祿之事今日取調差出候与之事昨日承て申候付多分書上り可申候

一宮内省云々之事今日制度調之見込尙又承可申候其上愚考可申上候

一對州人之儀建言書姓名も相分不申候間右建言書御手元は有之候ハ、早御差廻可被下候參朝之上尙取調可申候

一清國視察人名を當月六日頃歸朝之由承候故先日不取敢自宅に相招委曲承て置尙御尋之儀も可有之旨申聞置候臺灣實地を經歷之一人を彼地に滞留兩人を歸朝いゝし候由ニ御坐候是も其まゝニ而ゑ甚不相濟事ニ御

坐候御参ニ候得夫直ニ申上候含ニ罷在候

右拜答如此御坐候若御談之事被爲在候ハ、明朝ニ被成下候得ハ大幸ニ御坐候頓首

十二月廿日

利通

具視公開下

【解説】條公御書トアルハ十月十八日發病以來引籠中ナリシ三條公ヨリ出仕ノ旨ヲ通セラレタルナリ又官祿稅家祿稅ヲ賦課スヘキコトハ利通ノ主張ニ係ルモ木戸等コレニ異議ヲ唱ヘシカハ岩倉公ヨリ實施困難ノコトヲ報セラル、アリ利通ハ官祿稅ノコトハ外國ニモ例アリテ不當ノコトニアラサルモ若シ眞ニ不可ナレハ政府高官ヲシテ獻金セシムヘキコトノ意見ヲ述ヘ更ニ國家ノ現狀ヲ憂ヘ重要政策ノ勇斷ヲ痛論シタルナリ清國視察人名トアルハ兒玉利國成富清風ノ兩氏ニシテ是年二月

清國視察ヲ命セラレ十二月六日歸朝セルナリ

(岩倉家文書)

【参考】

其一 岩倉公より大久保への書翰案 明治六年十二月廿日
別紙條公書狀御内見可給候明日ニ同公入來萬事示談廿二日ヨリ廿五日迄ニハ左之件々御發表相成度と存候 當冬施行ナキ事モ書入候
一 廿三日ニハ久光卿及ヒ伊地知一翁等拜命之事
一 廿四日ニハ祿稅之事内閣御打合廿五日ニハ御發表之事
官祿稅明日條公示談ニ而同時御發シノ事ニ致シ度存候

大隈見込同時御發シ之事

木戸ノ處祿稅實ニ六ヶ敷様子今日勝遣し候其後小生行向心得伊藤内實色々承り候得とも十分盡力ニ心得ニ候

一 伊地知一翁當分兼官之事

一 來春中下旬ニハ魯國使節御治定之事 此時舊三木衆御所置候事

一 宮内省改革ノ事早々御見込承り度存候事 廿一日朝夕之内面上可申承候

案スルニ本
書ハ参考其
二ノ草案ナ
ルカ如シト
雖モ事件ノ
交渉マ、明
瞭ナルモテ
アルナリテ
特ニ収ムテ

一 陸軍卿早々御治定之事 伊藤話多分木戸奉命被行候事被存候

一 黒田申立殖民ノ事ト并海外生徒ノ義等今朝大木ニ申合可及御相談事

一 井上始メ御用滞在之事今更何トなく井上壹人残し候事折角御評決之義如何と存候間矢張御發表可然存候御内談申入置候

一 對州人之事伊地知へ令下知候長崎縣ニテ取調朝鮮通辯三人兼御咄し有之候通リ司法省申立有之今日直ニ被下知候御心得迄御咄し申入置候

一 清國視察人員中副島内意ヲ奉シ臺灣地方探索致者有之右夫々見込書爲差出候様外務へ申置候處即今各歸朝夫々見込書差上候旨ニ候過日御内話有之候末付右等被召出政府ニテ現場情實承候事可然存候其上免官成とも如何様とも被仰付可然存候

右荒々申入候所勞大亂書御推覽可給候尙巨細之事ハ廿一日朝夕之内

可及出會尙御様子後刻可承存候也

十二月廿日

具 視

利 通 大 人

【参考】其二岩倉公より大久保への書翰明治六年十二月廿日 (大久保家藏)

別紙條公書狀入内見候今日も小生令不參候

廿二日ニハ三條出仕ノ今日萬事申合置同日御一同御相談廿三日

ニハ久光卿伊地知一翁等奉命之運ヒニ致度事と存候

今日も小生令不參候
更ハ條虫治療之爲メ
ニハ月も不食ヲ兼用候
得共更ニ其詮無之
而已ナラズ疲勞不少
今日ハ保養之爲メ且
三條入來尙恐入
存候得共 令不
參候

一 官祿税之事ハ今日尙三條懇談同時發表之様致し度存候

一 大隈六七年分一時云々其人々情願ニ任セ候との事是も同時可然と存候

- 一 宮内省改革御見込之處可成早く御内示被下度候
- 一 魯國使節舊三木御所分之事等ハ來春早々之事ニ致し其節之御評議ニ可然存候
- 一 陸軍卿ノ處未定ノ由伊藤ニ承リ候得ま^とふる木戸承伏ニ可相成カノ模様ニ申居候
- 一 黒田申立殖民ノ^ヲ海外生徒ノ^ヲ此二ヶ條々今朝大木招キ置候間同人^ハ申含御談シ可申と存候
- 一 對州人ニ^ハ朝鮮國事情建言候某御咄申置候通リ伊地知ニ申入御用有之候ニ付御留置ノ事取計相成候
- 一 長崎縣ニ^ハ取調朝鮮事件關係通辯三人御咄之通リ司法省ヨリ申立有之早々同省へ引取之義昨日伺之通リ下知致候御心得迄ニ申入置候
- 一 清國視察人員各兩三日^ハ前歸國之旨ニ候兼^ハ先外務卿内意ヲ奉し臺

灣地方探索之者有之由過日御咄し之末ニ付旁一應右人も政府に召出し現場情實承候方可然と存候其上當人等之進退被仰付可然存候

右任御約^ハ條書同様申入候尙明夕カ明後朝カ何レ御懇談申度存候事ニ候早々以上

十二月廿日

具 視

利 通 大 人

七六一 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿日

(岩倉家文書)

【按】祿制發布ニ付キ木戸ノ諒解ヲ求ムヘク勝安芳ヲシテ談議セシムルコトニ關シ具申シタルモノナリ

木戸に祿制之儀談之爲昨日勝參候處留守ニ^ハ今日二時參候様与之事ニ候由右也

閣下御談之節承知仕左候得之勝之談無益ニ御坐候迎も同人ニ御談相出來申ましく候此旨鳥渡申上候何とる勝ハ御返事可然奉存候也

十二月廿日

利通

具視公閣下

【解説】祿制ノコトニ付キ勝ヨリ木戸ニ懇談ヲ試ムル筈ナルモ岩倉公ヨリ直接面談セラル、トノ趣ナレハ勝ノ來訪ハ無要ナルヘシトノ意ヲ述ヘシナリ

七六二 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿日

(島村久氏藏)

【按】對州人建白ノコト及ヒ支那ヨリ歸朝セシ成富清風等ノコトニ付キ公ノ書ニ答ヘタルモノナリ

敬讀仕候對州人云々ノ事取計候様トノ御沙汰ト心得違へ最早被爲濟候事ニ候得ハ無此上奉存候福島禮助之義承知仕候尙都合ヲ以出會可仕候外兩

人ノ儀ハ副島支那ヨリ差遣候者ノ内ニテ艱難ノ地ヲ跋涉イタシ候者ニ御坐候兒玉并ニ成富ト申者ニ御坐候

一勝木戸へ御談ノ義云々申上候事兼閣下ヨリ御談可被下同人ニ御坐六カシクト御咄モ有之若ヤ勝へ御申通之儀御取忘レ無之哉ト御案申上候卒爾ナカラ鳥渡申上候乍去思召有之候得之何モ別段強テ申上候事ニ無御坐候

一明後早朝御入來被下候趣奉畏候之し八字ニハ小臣拜趨可仕心得ニ御坐候

右拜復ノミ如此御坐候頓首

十二月廿日

利通

具視公閣下

【解説】福島禮助(九成)ハ舊佐賀藩士是年二月清國視察ヲ命セラレシカ九月ニ歸國セルナリ

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月廿日

(大久保家藏)

今朝御細答夫々何モ承候段々御配慮之次第小生ニモ十分盡力今日條
 公示談諸事速ニ相運ヒ候様可仕候箇條ニ付御返事不申入來示中對
 州人朝鮮國事件建白右ハ過日御互一同一見史官預リ居候筈ニ付御取
 寄御覽可給候且同人等ハ最早伊地知ハ申聞御用有之ニ付召留置候事
 取計爲致候旨御心得迄ニ申入候儀ニ候若シ哉御取違ニハ無之哉ト爲
 念申入候事ニ候○清國視察人名歸國後追々御聞取之旨尙福島禮助ト
 申肥前人(是ハ大隈大木モ至テノ知人ト申事之)
 右ハ殊更臺灣之事情承知之者ニ候間同人ハ一應御出會有之候様致シ
 度存候○先時御心得木戸ハ應接云々御尤ニ存候得共少々見込有之候
 間御任セ置被下度此一件ハ今日條公示談決極迄申合置取計心得ニ候
 ○御出會之事明朝之方御都合之旨承リ候得共明後早朝出頭之事ニ可
 仕ト存候仍テ早々如此候也

具 視

大久保殿

【参考】其二 三條公より岩倉公への書翰 明治六年十二月廿一日

(岩倉家文書)

口述

昨日御談有之候官俸税之儀各國にも比例有之候事ニ候得共異議も無
 之事ト存候於御旨存寄無御座候仍右御答申上候也

十二月廿一日

實 美

巖 倉 殿

副啓

昨晚御内書之趣逐一敬承仕候其中内閣之一件云々情實も有之候切迫
 之都合ハ篇与拜承候得共御官義も長々引入出仕之事故突然遮而決議
 申達候事甚當感仕候間參議之議論別席ニ承異論無之候ハ、即日可
 相決候猶參議中ニも得心不仕事ヲ突然出頭申達候ハ、少々心配仕候

ニ付何卒其邊ハ御諒察奉願度候仍恐存申陳候勿々拜具

七六三 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿日

(岩倉家文書)

【按】西郷從道ヨリ到來ノ電報ヲ贈リ併セテ意見ヲ述ヘタルモノナリ

別紙西郷ハ到來候付不取敢備御内覽候電報ニハ委細之事ハ分兼候半如何様顛末ニ候や懸念仕候西郷ハ尙又面會承候上相分候次第も御坐候ハ、則申上候様可仕候過日來申上候通分營之儀ハ十分固ヨ居候得共必ス子細有之事与愚考仕候何モ其々、難捨置事ニ付尙談合之上申上候様可仕候此旨早々頓首

十二月廿日

利通

具視 公閣下

【解説】是月七日鹿兒島分營燒失シ十二日解散セシトノ報熊本

鎮臺ヨリ是日陸軍省ニ達セルナリ

【参考】西郷從道より大久保への書翰 明治六年十二月廿日

(大久保家藏)

鹿兒島分營兵隊去ル十二日比瓦解之趣今日熊本鎮臺ヨリ電報ヲ以届出候間早速御報知申上候且過日御咄申上置候儀何分御熟考被成下度將明後二十二日夕川村ハ參堂仕度奉存候御閑靜有無明日ニモ拜承仕度此段至要而已草々拜啓書外拜眉ニ讓候敬白

十二月廿日

西郷從道

大久保參議公閣下

七六四 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿二日

(岩倉家文書)

【按】鹿兒島分營燒失ノコト及ヒ祿税ノコトニ付キ具申シタルモノナリ

過刻去御妨奉申上候御内話申上候鹿兒島分營燒失之儀情實之事ハ全ク

閣下限リニ申上置候事ニ付其段御含可被下候猶又一應御談申上候迄々同席中へも御扣被下度奉願候且又祿税等之事實に今日迄延引歎息之至ニ御坐候此内御内話も拜承必御斷決可被爲在与存詰候處今朝之御咄ニ亦々無御除義御譯ケル候半与心痛仕候兎角參 朝候上御評議も可有之ト奉存候間此儀厚御注意可被下候從來如此事件云々情實よて延引終ニ其味を失候事多々有之候事ニ御坐候此旨一應奉申上置候也

十二月廿二日

利通

具視公閣下

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月廿二日

(大久保家藏)

拜承西郷書狀一見鹿兒島分營兵隊瓦解之來報達此如何之事ニ存候過日御噂ニハ去ル八日分營焼失十二日瓦解ト申次第何様子細有之候事ト存候此上ハ西郷河村黒田等御懇談之上御分リ丈ノコトハ一二爲御聞可被下候但シ今日モ條公入來諸事都合ヨロシク世上發表迄ハ精々不

洩方可然存候明朝木戸出會候得トモ何モ不知處ニ亦爲相濟候心得ニ候仍早々如此候也

十二月廿二日

具視

利通 大人

且申候西郷書狀令返入候也

七六五 黒田清隆への書翰 明治六年十二月廿二日

(永山男爵家藏)

【按】鹿兒島分營解散ノコトニ付キ談合ノ爲メ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

昨日夫御投翰ニ預候處留主中よて御回答も不申上失敬仕候鹿兒島分營瓦解之一條ニ付亦ハ早速承知仕候御情實承候得ハ畢竟鼓動ニ依テ終ニ右之始末よ及候趣ニ被相聞貴島ニ亦罷居候ハ、動ルされましく候處最初分營確定之條理も相倒を遺憾之至ニ御坐候就る夫尙御談合之儀も有之候付

今日第三字比よて御出被下候得ハ大幸奉存候此旨乍略儀以書中奉得御意候也

十二月廿二日

利通

清隆様

【解説】是日利通ハ黒田及ヒ海軍大輔川村純義陸軍大輔西郷從道陸軍少將野津鎮雄等ト會見シテ鹿兒島分營ノ處置ニ付キ談議シ川村ヲ鹿兒島ニ出張セシムルコトニ決セリ書中「貴島」トアルハ鎮西鎮臺第二分營大貳タリシ清ニシテ貴島ノ如キ人物在ラサリシヲ以テ斯ル大事ニ至リシヲ遺憾トセシナリ

七六六

税所篤への書翰 明治六年十二月廿三日

(大久保利武藏)

【按】鹿兒島分營ノ解散ヲ報シコレカ鎮撫ノコトニ及ヒタルモノナリ

拜啓愈御安康被成御勉勵奉敬賀候次に小子依然相勉候付御降慮可被下候過日夫御投書辱拜讀御沙汰之通意外之事に成行心事御推計可被下候此に至何も不及辨條理に倒れるより外なし頃日又鹿兒島分營瓦解之報あり是畢竟煽動之爲に此時宜に立至り候趣誠に遺憾之至に御坐候かならず九州表は一般波及之姿に可立至如何成行可申候や此末之處何共難圖候初發より平々凡々にあは可相濟行懸に無之必如此之事故に可有之決定之譯故今更可驚にあらず候得共 聖慮所在は全國人民之安穩を保より外に主とする處無之就あま是非至當之條理を以鎮撫する處に着手すへし國家之安危を天に任せ心力之及限りと獨決仕候嗚呼如此之盛時にして如此之事變を生する天宗社を祚せざる乎是非如何をしらす委曲之事情は中々筆紙に難申盡此度松陰子歸坂被成付何も御直聞被下度餘は省略仕候
一次郎子は追々相見得別あ勉強よほと成進候由決あ御懸念に及不申候
一得能吉井兩子も至あ無事乍去吉井は例之風邪にて引入候得共最早よろ

しく兎角に當夏已來弱り候體なり得能は本復に候
一當府にも追々出火有之何か穩ならぬ形情に候暫時之間は人心居合兼可
申候

右任幸便御答書旁如此御坐候 頓首

十二月廿三日

利通

税所尊老臺下

尙々御令聞へよろしくおみつのかたへも同斷御願申上候

七六七 畠山義成への書翰 明治六年十二月廿五日

(市來正哉氏藏)

【按】米國ヨリ來着セシ書翰ヲ廻送シ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ
別紙到來子供書面ニ有之候哉ト開封イタシ懸候得共相分兼候付差上
候間御一覽可被下候明日ハ御暇有之候ハ、朝之内ハ用向有之候得共晝頃
御出被下候得ハ仕合御坐候若御約束有之候得ハ明日ニ限リ不申候付明後

日ニ有モ宜ク御坐候此分御願申上候也

十二月二十五日

利通

義成様

【解説】畠山ハ杉浦弘藏ノ改名ナリ

七六八 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿六日

(大久保利武藏)

【按】政務ニ關スル公ノ諮問ニ答ヘタルモノナリ
昨夜ハ尊書被成下敬讀仕候種々以箇條被示聞逐一承知仕候願問被命候ニ
付有ハ年内廿八日比ニ

臨御被爲在魯使節歳出入等之箇條御評議如何之趣承知仕候魯之事々此内
ハ追々愚考も申上候通漫然議論相成候ハ纏テ相付兼候ニ相違無御坐候
ニ付篤与條公御打合悉皆御確定之上御評議之方可然乍去夫迄ハ十分之
御談合相調御据テ付候上かれハ一日ニ有モ早目之方無此上奉存候歳出入

之事も書類等相揃不申候も空ニ議論も出来申ましく候ニ付一應大限の御談可然奉存候廿八日夕陪食被仰付候ハ、強而臨御之事御評議不被爲在候も宜鋪候半歟とも愚考仕候

- 一内閣取調之儀ニ付伊地知の談之事承知仕候是を寺島伊藤より形行を以相談候方當然与奉存候小臣私ヲ以相咄候事ハ都合次第可申聞候
- 一陸軍省定額金之事同斷小臣考ヲ以都合次第示談之考ニ御坐候
- 一毎々申上候事ニ付自ら思食可被爲在事あるら段々事情切迫今日之事を一步を誤候得ハ實ニ國家之安危ニ關係仕候間寸陰を争ひ不申候もハ不相成時節与奉存候即今一層承候事も多々御坐候且又參坐之事も中々容易ニ可被召置事ニハ有御坐ましく奉存候
- 一御頂戴物之御吹聴拜承仕候

右乍延引拜答而已如此御坐候頓首々々

十二月廿六日

利通

具視公閱下

【解説】顧問被命トアルハ久光公ノコトニテ廿五日内閣顧問ヲ命セラレタルナリ廿八日比に臨御云々ハ當日大臣參議ヲ赤坂御所ニ召サレ御陪食ヲ賜フ際ニ魯國使節派遣ノコト及ヒ歳出入豫算等ノ重要問題ニ關シ諮問アラセラル、ヲ云フ内閣取調云々トアルハ是年十一月制度取調御用兼勤ヲ伊地知正治ニ命セラレシモ別ニ政體取調掛ヲ設置セシカハ伊地知ニ對シ兼官ヲ免スルノ傳達ヲ依頼サレシモノニテ翌年二月ニ至リ實現セラル末文參座云々ハ京都府參事榎村正直ノ小野組轉籍事件ニ依リ是年十月九日新タニ制定セラレ裁判官以外ニ各省官吏中ヨリ參座員九名後十三名トナルヲ命シタルモノニテ今日ノ陪審制度ニ當ル但シ參座制ニ付キテハ政府部内ニ於テモソノ弊ヲ論シテ反對ヲ唱フルモノアリ是月廿九日遂ニ廢止セラレタ

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月廿五日 (大久保家藏)

前略今日ハある段々御配慮之箇條も判然御決定令安心候

○今朝早々ヨリ久光卿入來兼申入置候次第ト今日顧問ニ被命候處と相違之子細申入候處決る不平無之様子ニ候亦三ヶ條之義書類得と一覽被致候上得意之様子矣段々と咄し有之候先以令安心候得共一方ノ論如何ント存候而已

○顧問被命當年之處ニ今日丈ノ御用と申候ハ如何哉廿八日魯國使節ノ事カ亦大隈申居候歳出入ノ事ハ今一ヶ度御評議有之候ハ、可然ト存候得共先内々御談シ申入候廿八日比夕五時御陪食^{三職}被仰付候ハ如何と今朝 思召之旨徳卿より内談是も御内談申入候
○今朝小生午後一時赤坂より御用召若シ政府御用候ハ、息可差出御沙汰ニ付愚息參入候處不存寄別紙之通り御口達金千圓拜受實ニ恐怖

之事ニ候不取敢御吹聴申入置候條公ニも同様賜り候との事ニ候右ニ付ハ尙御談シ可申事も可有之事と存候

○兵部省金子之事貴卿ハ西郷ハ御懇談可被下其模様分り次第御内示可被下候

○内閣議定取調之ヲニ付ハ數度手数ノ由ニ候處頓ニ御不用と相成伊地知松岡等ハ右之旨趣寺島伊藤ハ申聞候トハ存候得共伊地知御出會候ハ、情實御申置可給候
右一筆申入置候以上

十二月廿五日

具 視

利 通 大 人

尙々今日賜物ノ事不存懸三條島津兩人共ニ病體ニ付御召古シ馬車被下候様昨日願置明日取計相成候筈ニ候内々申入置候以上
當時勢ノヲニ付ハ懇々御談シ申度次第有之候得共條公ト諸事内

決ノ上可及内談と存候事ニ候

【参考】其二太政官達明治六年十月九日

司 法 省

先般京都府知参事裁判一件ニ付陪審被設候段相達置候御詮議之次第有参座ト改メ別紙之通規則相定候條此旨相達候事

参座規則

臨時裁判所ニ於テ裁判ノ公正ヲ證スルカ爲メ参座ヲ設ク其規則左ノ如シ

- 一 参座ハ其時ニ臨ミ内閣ニ於テ議定シ諸官員ノ中ヲ以テ之ヲ命スヘシ
- 一 参座ハ九人ト定ム若シ已ムヲ得サル公事アルトキハ缺席ヲ許スト雖モ六人出席セサレハ裁判ヲ行フ事ヲ得ス
- 一 罪ノ輕重ヲ決スルハ判事ノ任ト雖罪アルト否トヲ定ルハ参座ノ權

トス

一 拷問ヲ用フル時ハ参座ノ承諾ヲ得テ然ル後行フ事ヲ得ル

右條件ノ外増加或ハ斟酌スヘキハ参座實際ニ於テ取調可伺出事

参座任命

大内史	土方久元
權大内史	小松彰
二等議官	細川潤次郎
二等議官	西岡逾明
少内史	日下部東作
四等議官	三浦安
五等議官	淺井晴文
大藏大丞	渡邊清
大藏省六等出仕	竹内綱

後外務少輔山口尙芳文部大丞野村素介權大檢事岸良兼養明法助鶴田皓任命セラル

七六九 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿七日

(岩倉家文書)

【按】出頭ヲ促サレタルニ對シテ答へ猶ホ參座ノコト及ヒ榎村ノ處分ニ付キ具陳シタルモノナリ

拜讀仕候明朝八字出頭云々之趣奉畏候同刻出頭之心得可罷在候扱參坐之儀放解相成候ハ實ニ殘心奉存候而是非今晚御示談ニ依有罪之一言を參坐之誤ニ成候様御配慮偏ニ奉願候若今晚土方欠席ニ相成候ハ、今晚ハ取究めおしニ而明朝迄御延し置被下度是非土方等御宅に御招今一應御説諭被下度乍不及小子も參上一言及論破度奉存候此旨拜答艸々如此御坐候頓首

十二月廿七日

利通

具視公閣下

七七〇 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿八日

(樺原新輔氏藏)

【按】三條太政大臣ノ意見ニヨル西郷前參議等復職ノコトニ付

キ公ノ諮問ニ答へタルモノナリ

今朝御内話拜承仕候事件云々愚存拜答仕候旨趣ハ元來奉職已來上聖旨之所在ニ從ひ次ニ兩公御確定おされ候廟議ニ依り勉強盡誠仕候格議ニ有之候間今日之處々今日之聖旨を遵奉候義當然与存候尤此度政府上諭之寛急お終り瓦解ニ立至り候義にて今日之國難お固より初發より期せる處ニ有之候得ハ如何様大難ニ處しても一步も願念おく國家之爲抛身命盡力仕候事ハ敢て不辭處ニ御坐候就る此上之處益御確定之廟模を以順序を不失神速實地之行跡相舉候様晝夜苦慮罷在義ニ有之然るに今朝之御内話ニ付實ニ意外ニ奉存愚意確定之所存を以拜答仕候義ニ御坐候乍去今日

太政大臣公之思食ニ對し決る御非難申上候趣意ニハ毛頭無御坐候勿論前
 議寬急兩件共事倉卒ニ出テ候事ニハ天下後世を慮テ國家之大體上より之
 熟論ニ無之候ニ付既往を論せ及前參議も盡ク復せられ寬急論之前ニ立歸
 り更ニ公評ヲ以御一定可被爲在與之御事ニ候得之固より御條理之相立候
 事与奉存候間決る御趣意を拒抗奉テ候義之無御坐候ニ付其段ハ分る御誤
 解無之候様御含可被下候況乎小臣一己之所存申上候とて夫を以御止テ被
 下候様よてハ實ニ恐縮之至乍恐御職掌上ニおひても不被爲濟御義与奉存
 候付幾重にも御熟考參議中之公評も御聞被下候様千萬祈願仕候其上公議
 を以御治定之事を小臣ニおひて一言を容候心底無御坐候小臣之所存之
 身丈ケニ決定仕候趣意を吐露仕候迄ニ御坐候今日之形勢天下安危之所分
 必死切迫之情態ニ付大臣タル之御職掌上ニおひて御不安心なら御屈曲
 被爲在候事有之候之實以大事之儀甚小臣ニおひても恐懼仕候猶又熟慮
 仕候處前件甚懸念仕候付爲念以寸楮奉申上候頓首百拜

十二月廿八日

利通

具視公開下

尙々今朝愚存決定初發之旨趣之固分終始相變候義之毛頭無御坐候
 付左様御承知被成置可被下候

【解説】三條公ノ病氣全癒シテ再ヒ大政ヲ見ル時ニ當リ征韓派
 ノ有志猶ホ朝政ヲ批難シテ止マス公ハ政府ノ前途ヲ憂慮シ西
 郷等ノ前參議ヲ復職セシメント欲シコレヲ岩倉公ニ計ル岩倉
 公ハ乃チ利通ヲ招キテ其意見ヲ求メラレシニ利通ハ之ヲ意外
 トシテ所見ヲ陳述セシカ歸邸後更ニ本書ヲ呈シタルモノナリ
 書中前議寬急兩件ハ征韓樺太兩問題ノコトニシテ樺太事件ヲ
 先ツ解決セントシタルヲ云フ

七七一 岸良兼養への書翰

明治六年十二月廿八日

(天久保家藏)

【按】坂元國分等カ三條公ニ強要セシ件ニ付キ注意スルトコロアリシモノナリ

先刻夫態々御出御面働成上候彼兩人一條唯今別紙之通申來候付多分格別之事も有之ましく過刻も申上候通探偵之者過念歎も難圖仍亦明朝御談之都合其合ヲ以御申入被下度御頼申上候乍去度々條殿は出頭議論あましく申立候ハ相違無之何分も卑劣之所業与相考候此旨爲念別紙相添申上置候也

利通

兼 養 殿

【解説】彼兩人トアルハ警保助タリシ坂元純熙國分友諒等ニシテ屢三條公ニ西郷等ノ前參議ヲ復職スヘキコトヲ強要セシナリ利通ハ更ニ公ノ身邊ヲ警戒スルノ必要ヲ感シテ司法權大檢事タル岸良ニ然ルヘキ配慮ヲ依頼セシモノナリ

七七二

利和伸熊への書翰

明治六年十二月廿八日

(天久保家藏)

【按】米國留學中ノ兩兒へ送リシモノナリ

一 夫て申入候追々寒氣強候處愈以相揃無事被致勉強候筈珍重之至存候次ニ拙者ニも別々元氣相勉候付少も懸念被致ましく候
一 縣元宿許ニも一同無事追々吉左右有之當所達熊始大元氣よて候安心可被致候

一 十一月卅日高橋氏着よて書狀も一讀且直左右も委曲承知各勉強毎々學校出席之由大ニ致安心候

一 別紙高橋氏は宛差出置候處同人歸朝よて行違ニ相成又々歸リ來候付此節便よ其マ、差遣候付一覽可被致候

一 前田氏ハ縣元ハ歸ら未出府無之近々出府可有之候

一 高橋氏ハ來早春自費書生ニ亦又々米國留學之筈よ候御方ホ事も時宜

ニ依候而ハ來夏休業迄ニ一應被致歸朝皇國漢學二三年修業重而洋行以
 之し候方宜ク与存候來夏迄之内普通之學業可成爲相濟候賦よて一入勉
 強可被致候尙委曲ハ高橋氏歸米之節可申遣候得共其内爲心得申遣置候
 付左様承知可被致候
 一來年學費金之儀可成此節差送り度存候得共色々多忙よて其儀相調兼候
 付正月ニハ必遣し可申候其内之處高橋新一殿ハ頼遣候付左様承知可被
 致候

右一左右迄如此候也

十二月廿八日

利通

利和殿
伸熊殿

七七三 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿九日

(岩倉家文書)

【按】參座ノ停止ニ付キ木戸ノ諒解ヲ求ムヘキコトヲ具申シタ
 ルモノナリ

別紙大限ハ相廻候付一覽之上返上仕候扱今日參坐被止候事必一方ハ議
 論も可有之其邊之何も顧るよ不及候得共潜ニ相察候ニ參坐之論も必因
 來る根據も可有之若哉木戸邊ハ建白ナト有之候而之別不都合之事与奉
 存候當職ニ罷居候得ハ早速同人ハ御通置有之方可然候付伊藤ハ御含メ
 相成候方宜鋪候半与奉存候今朝猶又御會議可然与申上候も其邊之趣意も
 有之候處今朝之處ニハ一同異論無之候尤太政大臣殿御決斷相成候事故
 正院之處一定之事候間外ニ異儀有之筈も無之候得共若伊藤之方相後を候
 而之先入爲主大ニ不平を唱へ候事も難圖此内ハ榎村一條之行懸も有之候
 付存付之儘不取敢内々申上候拜答々々

十二月廿九日

利通

具視公閣下

尙々來人中ニ亦亂筆御高免可被成下候

【解説】是日廟議ハ參座停止ノコトニ決定セシカ利通ハコレニ對シ木戸參議等ヨリ異論ノ出テシコトヲ顧慮シ速ニ伊藤博文ヲ通シテソノ諒解ヲ求ムヘキ旨ヲ以テシタルナリ斯クテ榎村處置ノコトハ三十一日ニ至リ京都裁判所ノ判決ニ依ルコトニ決セリ

七七四 岩倉公への書翰 明治六年十二月廿九日

(岩倉家文書)

【按】重大事件ニ付キ明日面謁ノコトヲ述ヘシモノナリ

今朝言上仕候事件ニ付ハ實ニ不容易重大之義ニ候間實ハ前以心事も委曲奉達尊聽置度所存ニ候得共今朝早天御出會之事ニ相成候付不得止背本志候次第ニ御坐候自ら條公ハ深御計りも可被爲在且即今之形情ハ不及言既往ニ鑒ミ將來を推し利弊之在る所ヲ詳ニして今日適當之御改革不被爲

在候ハ不相濟時機与奉存候仍る明日午前御都合之時間拜趨猶又詳悉言上仕度奉存候間何時比御差支被爲在ましくや一寸奉伺候一時間位之御繰合セを以拜接相調候得ハ別ハ大幸与奉存候此案寸刻を爭候重事件与心配仕候故乍彈以楮上如此御坐候勿々敬白

十二月廿九日

利通

岩倉公

七七五 岩倉公への書翰 明治六年十二月卅日

(榎原新輔氏藏)

【按】樺太事件及ヒ魯國遣使ニ關スル閣議ニ付キ公ノ書ニ答ヘ

タルモノナリ

尊墨拜讀仕候扱今日ハ條公御懇談明日御集會御見込之由拜承仕候實ニ不容易御大事之義殊ニ旦夕ニ迫リ候御急務ニ御坐候間是非速ニ御確定明日御治定被爲在度難事ハ凡ハ後日ニ譲リ候様ニテハ萬事之運も夫り爲延引

必定國家之大事を誤リ可申今日之處にてハ是非御究リ相付正月ハ判然御發表順序相立候様無御坐候てハ瓦解と奉存候何れニしても御安着相付處よて判然御斷決有御坐度千祈萬禱仕候尤此行懸リ兩様共御難事相違無御坐候間非常之御憤發被爲在候様吳々奉祈候勿論兩公御決定にて明日之衆論を御治定之事ハ無申迄奉存候右外被示聞御ケ條之趣ハ拜承仕候大原卿老體且病氣にて御服制着用御免之事ニ於てハ制度ニ相懸リ御大事之事ニ奉存候間幸明日御集會ニ候得去一同へ御談有之方可然奉存候此旨乍延引拜答如此御坐候頓首

十二月卅日

利通

具視公閣下

【解説】三十一日ノ閣議ニ於テ樺太事件及ヒ魯國遣使ニ關スル問題ヲ議スヘキ旨ヲ岩倉公ヨリ通セラレシヲ以テ利通ハ事最モ重大ナレハ兩公ニ於テ英斷ノ上決定セラレンコトヲ述ヘ明

春早々發表ノコトヲ促シタルナリ

(大久保家藏)

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月卅日

昨夕來狀之處來客中失禮仕候扱參座被解候ニ付ハ木戸云々伊藤申含之事御尤頓ト不心附事ニ付今早々小生一分心得ヲ以伊藤申遣候○今日ハ三條懇談之上明日之御集會可相成見込ニ候○河村も内願不相叶處一件承知ニテ明朝發途之旨ニ候○制服之事奈良原招寄爲念申入置候同人ニも盡力着用相成様可致見込之旨ニ候大原之處ハ老年且病體之故ヲ以テ當分之所願ニ候ハ是レハ特典ニテ強テ差支も無之事と存候仍早々如此候也

十二月卅日

具視

利通 大人

七七六 岩倉公への書翰 明治六年十二月卅一日

(岩倉家文書)

【按】木戸來訪ノコトヲ報セラレシニ對シ答ヘタルモノナリ
謹讀仕候木戸入來御長談被爲在候處未御決答ニ至らば猶早春御示談与申
事ニ相成候趣被示聞奉畏候此上御高配被爲在何与る判然なる究り相付度
祈望仕候昨日伊藤之示談も洞徹致兼候趣ニ承候何も來陽委曲拜承可仕候
拜復迄艸々如此御坐候謹白

十二月卅一日

利通

岩倉殿

尙々御内儀よ

思食ニ御肴御拜領之由ニ御分與被下候段難有拜受仕候何も參上
可奉謝候也

【解説】當時木戸ハ參議ヲ奉職スルノミニテ未タ省ノ長官ヲ兼
任セザリシカハ政府部内ニ於テ大藏卿若クハ陸軍卿ニ任セン
トスル議アリ然モ木戸ハ政府ノ施政カ己レノ抱持スル意見ト

乖離スルモノ多キヲ以テ容易ニ肯ンセス書中「未御決答ニ至ら
ば」云々トアルハコレヲ云フ

【参考】其一岩倉公より大久保への書翰 明治六年十二月卅一日

今日午後木戸入來頗ル長談尤小生ヨリ内閣云々一件及懇談ニ候處種
々衷情吐露有之候乍去成否分明ニ至ラス眞實如何哉推察も届る候
勿論早春今一應示談と申事ニテ被引取候此段一筆申入候何レ來陽面
上萬々可申入候早々以上

卅一日

具視

大久保殿

【参考】其二三條公より大久保への書翰 明治七年一月五日

(大久保家藏)

彌御安泰大賀候然々木戸進退之儀今日右大臣ハ充分被及懇談候處漸
く承服之模様多分奉命可致趣併明一日計猶豫相願度其上返答可申出
由ニ付此段老臺へ拙者ハ内々申入置候様右大臣ハ依頼ニ付此旨申入

候尙萬々期面上候勿々如此候也

一月五日夜

實美

大久保殿

七七七 岩倉公への書翰 明治六年十二月卅一日

(岩倉家文書)

【按】丹羽ヨリノ書ヲ贈ラレシニ對シ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候丹羽カニニ通并ユ外壹通儘ニ落手仕候猶一覽大隈ハ可相廻候壹
通一覽之上返上可仕候只今來人中別段御細答不申上候拜答迄艸々頓首

十二月卅一日夜

利通

具視公閣下

七七八 岩倉公への書翰 明治六年十二月卅一日

(岩倉家文書)

【按】華族梅溪ノコトニ付キ公ノ書ニ答ヘタルモノナリ

尙々別番ハ返上仕候

御書敬讀仕候如尊論當季節殊ニ平穩ニ而御同慶不過之奉存候陳々花族梅
溪之一條云々被示聞趣承知仕候此内就御内話則爲取調候處大凡相分候付
先動の事ニ相成可申候間左様御承知可被下候此旨拜答迄艸々如此御坐
候拜具

十二月卅一日

利通

岩倉公

大久保利通文書卷二十六

七七九 岩倉公への書翰 明治七年正月二日

(岩倉家文書)

【按】公ヨリ内談ノコトアリテ來邸ヲ求メラレシニ對シ答ヘタルモノナリ

尊書謹讀仕候一昨日集會之末猶今日條公は御示談被爲在不容易重事件ニ付小臣は御内話之義有之明日拜趨可仕旨奉畏候明日條公は御招ニ付右引取參上仕如何ニ有之哉乍去御書中參 朝之儀有之四日ハ政始ニ亦自ら參 朝之心得ニ御坐候へ共四日迄は何事も無御坐休暇之積ニ罷在候若や四日之退出後之思食ニ亦ハ有御坐ましくや同日ハ退出後直ニ參上仕候亦も宜ク又二字ニ亦も差支無御坐候明三日之事ニ候得之條公より引取懸ケニ亦宜ク御坐候ハ、參上可仕若又明朝之方御都合宜ク候ハ、十字頃カ

參上仕候も宜ク御坐候此段乍恐一應御伺申上候若明後四日之事ニ候ハ
退出ル則參上可仕候間別段爲御知ニ及不申候明日之事ニ候得ハ今一應
御沙汰奉願候小臣心得違歟も難圖候得共明日ハ全ク參朝之儀無之与存
候付拜答旁如此御坐候頓首々々

正月二日

利通

具視公閣下

【解説】「昨日集會」云々トアルハ前年十二月三十一日ノ閣議ニ
於テ樺太問題ト魯國遣使ノコトヲ議セシヲ云フ公ヨリ明日退
朝後來邸ヲ求メラレシモ三日迄ハ休暇ナレハ四日ノ誤リナラ
ンカトテ問ヒ合セタルナリ

【参考】其一三條公より岩倉公への書翰 明治七年正月朔日

(岩倉家文書)

新年益御安寧御加齡奉賀候然々昨日評議仕候事件實ニ此末之結局一
大事と苦慮仕候如此事ヨリ政府議論分離致候る々誠ニ大事と存候間

申も疎之義ニ候得共篤御考慮奉萬禱候尙亦内々御話申候愚論之一件
必竟拙者之趣意ハ當今政府諸省迄も公論ニ御懸相成候ハ、如何可有
之与の旨趣ニ決して舊參議ヲ復し度旨意有之候存念ニハ無之候處
自然其邊當參議中如何ニ疑念有之候る々不容易大變ニ可至候間何卒
其邊ハ御含被下度極密ありら伊藤抔其邊疑惑も有之愚存申上餘程不
快ニ思居候様子ニ内承仕候間偏ニ此處ハ御保救奉願度候自然右等之
疑惑ヨリ小生と當參議中之間も隔意ヲ生し候る々實ニ於小生も心外
之次第ニ御座候間吳々御依頼申候苦慮痛心之餘密々以書狀御願候早
々拜具

一月一日

實美

岩倉右大臣殿

御密披

【参考】其二岩倉公より大久保への書翰 明治七年正月二日

(大久保家藏)

新年彌御安全御超歳令賀候扱今日ハ條公方ハ行向只今引取候
一昨日集會之事件實ニ重大之義ニホ苦慮此事ニホ同公ニモ種々内話
ニ候就ホ小生一分限リ貴卿ハ内談致シ度次第有之候間乍御苦勞明
朝御參御用ハ直ニ可相濟存候間御退出後何時ニテモ(十二時迄)來臨相
成間敷哉御都合ニホ午後二時比ヨリニテモ宜敷候否御一筆被下度如
此候也

一月二日

具視

利通卿

七八〇 岩倉公への書翰 明治七年正月二日

(樺原新輔氏藏)

【按】公ヨリ再度ノ書ニ接シコレヲ謝シタルモノナリ

一再應之尊書敬讀仕候明後四日政始退出を參上可仕旨奉畏候明三日元始
祭ニ付八字四十分參 朝之義全く心得違仕居度々御面倒奉懸甚以恐縮仕

候眞平御海量可被仰付候右御請御斷艸々如此御坐候頓首多罪

正月二日夜

利通

具視公閣下

【解説】利通ノ上レル前書ニ對シ明三日ハ元始祭ニテ參朝日ナ
ル旨ヲ岩倉公ヨリ答ヘラレシカハ全ク自分ノ心得違ヒナリシ
コトヲ謝シタルナリ

七八一 吉田清成への書翰 明治七年正月二日

(遠藤妻吉氏藏)

【按】内務省ノ人員取調方ニ付キ依頼シタルモノナリ
目出度被成御超歳候筈奉敬賀候シカレハ近々之内内務省設立相成可申候
付兼ホ御頼申上候人員取調之儀御取究被下候様御頼申上候庶務受付記録
用度等之課ヨリ配分いさし度候間愈内務省へ御遣之分御治定可被下候小
生ニハ人物も不相分候付松方子へ御談合御公撰被下度過日モ同人へ談置

貴兄へ打合可被吳旨申置候内務省へ離レ候との偏頗ノ御撰ハ無之事ト信用仕候付全御委任申上候付願クハ兩日中ニ御内調被下其上大藏卿へ御談可被下候別紙一袋差上候付御落手可被下候餘ニ處ハ既ニ御撰相成居候付御調通ニテ決テ異論無御坐候前條參上御直ニ御頼申上度候得共昨夜ヨリ少々不快有之今日中外出難致候付乍卒爾以寸楮此段御頼申上候猶近日中以參旁可申承候艸々頓首

正月二日

利通

清成様

【解説】内務省へ御遣ニ分云々トアルハ大藏省ヨリ新設ノ内務省ニ轉任セシムルノ意ナリ吉田ハ時ニ大藏少輔松方ハ租稅權頭正義文大藏卿ハ大隈重信ナリ

七八二 岩倉公への書翰 明治七年正月四日

(岩倉家文書)

【按】公ヨリ來邸ヲ求メラレシニ對シ參邸ノ時刻ヲ問ヒ合セタルナリ

今日退出より參上可仕御約束申上置候處所勞ニテ參朝ハ相調不申乍去最早快方ニ付後刻參上可仕何時頃御退出可被爲在候ヤ御尋申上候三字より外ニ約束有之候付其内ナレハ仕合ニ御坐候付御退出後直ニ參上仕度奉存候此段乍恐以寸楮奉伺候敬白

正月四日

利通

具視公閣下

尙々過日御評議濟相成候新田義雄内務少丞拜命ノ事明日ニても被仰付候様御下知奉願候既ニ條公御内達も相願置候付表面御達ハ四日後ニ御治定相成居候事ニ御坐候

【解説】新田義雄ハ東京ノ人利通ノ推薦ニヨリ七日内務少丞ニ任セラレ記録課長ト爲レリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治七年正月四日

(大久保家藏)

令一見候

退出時限難計尙此方ヨリ更ニ可申入候三時以上御差支之旨承知致候
○新田ハ今日伺濟來ル七日拜命ノ都合ニ令下知置候○木戸モ來ル七日拜命ニ都合ニ候○明日ハ政府休日 皇居宴會計ニ候午後四時也 右一筆申入候早々以上

一月四日

尙々御所勞御大事之様存候

大久保利通殿

具 視

請

七八三 黒田清隆への書翰 明治七年正月四日

(大久保家藏)

【按】内談ノコトアリテ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

彌以御安固被成御坐奉敬賀候扱自由之至ニ御坐候得共少々御内談申上度事件有之付明朝御差支不被爲在候ハ、御來杖被下候得ハ別ニ仕合奉存候參上可仕筈之處兩日就所勞引籠候付乍略義以書中此段奉願候拜首

正月四日夜

利 通

清 隆 様

七八四 高橋新吉への書翰 明治七年正月五日

(大久保家藏)

【按】歸朝中ノ高橋へ在米兩子ノコトヲ依頼シタルモノナリ

尙々子供書狀二通御遣被下辱奉存候追テ返上可仕候別ニ無事勉強之由仕合之至御坐候

一昨日去御返書致拜讀候桑港郵便船之義昨日承合候得去來ル八日方与中事ニ御坐候間御一封御遣被成候ハ、明日早目拙者方迄御遣可被下候學費之儀今日濱海迄差出爲替取組五六百之間差遣置筈ニ御坐候跡々貴兄御渡

航之折御願申上所存ニ御坐候昨日爲御知可申上候處昨日未終日繁用ニ亦乍存延引以し候當夏休業ヲ歸朝爲致候事ハ貴兄ガも委事御申遣置可被下候此旨艸々拜首

正月五日

利通

高橋様

【解説】濱海ハ横濱ノコト兩子ニ對シ一旦歸朝ヲ命シタルモ猶ホ高橋ヨリモ勸告セラレンコトヲ依頼シタルナリ

七八五 岩倉公への書翰 明治七年正月六日

(岩倉家文書)

【接】公ノ書ニ答へ魯國使節人撰ノコト及ヒ警保寮ノコトニ付キ具申シタルモノナリ

過刻々尊書被成下敬讀仕候然々先日御内談之末大隈勝寺島伊藤御熟談被爲在何事も格別異存無之前議貫通之事ニ相成候由猶明日未使節人撰條公

御示談速ニ御決可相成思食之旨委曲承知仕候左様御坐候得ハ實ニ國家之大慶与安心仕候今日未勝入來ニ亦種々咄有之さして異存之向も無之相見得申候彼坂元國分かと御迫り申上候義々先日も御内話申上候通ニ御坐候間以御合御動搖無御坐候様御咄合有御坐度彼等ハ十日迄有無相分候与申合候趣何り間違居候事与懸念仕候尤海老原と申者誠ニ取ニ足らざる馬鹿ものニ亦決御恐怖可相成ものニ無御坐候今日之様子ニ亦未と煽動説多ク未とゆとり參候者も可有之与奉存候○魯使節人體之事猶又條公御示談之趣も可有之候得共過日御内話申上候通斷然小臣ハ拜命被仰付度奉存候此義々厚御勘考被成下候様千萬誠願仕候○明日未是非暫時ニ亦參朝内務之事も御決裁相願候含御坐候得共乍失敬未下痢相止ミ不申甚困却仕候就ハ明日迄不參ト奉存候就ハ差向警保寮之一件少々未決ニ亦章程も相調居不申昨日伊藤へ相咄合同人所存ハ陸軍ハ附屬相成候方可然与申居候ニ付如何様共速ニ御評決有之様と申置

る次第ニ御坐候仍而尙明朝大木は相咄合可申候間是非早目御治定可被成
 下候十日迄は内務省御開キ之運ニいふし度奉存候警保察之事當時与不と
 内情も有之川路も心配中ニ付少々機を誤候ハ別不都合ニ可有之候付
 如何ニ成候共川路は御内諭之上御處分可然与愚考仕候○明後八日ニハ是
 非參朝仕可申候間内務省大少丞已下之進退等之事相伺可申候八日正院之
 御都合如何ニ可有御坐や陸軍解隊式之方も有之若兩大臣公も御參 朝無
 之事ニ候ハ、其儀相調不申候付明日中何様与り都合不仕候ハ不相叶候
 付何分御模様奉伺候

右拜答旁如此御坐候治療央よて過刻と御返詞不奉申上失敬仕候頓首
 々々

正月六日夜

大久保利通

具視公閣下

【解説】「先日御内談」云々トハ樺太問題ニ關スルコト「使節人撰」ハ

魯國遣使人撰ノコトニシテ利通ハ自ラソノ任ニ膺ランコトヲ
 請ヒタルナリ「坂元國分」云々ハ警保助タリシ坂元純熙國分友諒
 ニシテ征韓ノ斷行ヲ三條岩倉兩公ニ強要シ十日迄ニ決答ヲ得
 ントシタルナリ海老原ハ穆時ニ司法省出仕ニシテ坂元等ノ一
 味ナリシカ亦征韓延期ヲ不滿トシテ辭職セリ「警保察之事云々
 内情」トアルハ坂元等ノ如キ征韓論者アリテ察ノ統一ヲ缺クコ
 ト甚シカリシカハ警保助川路利良ニ内諭シコレカ徒ヲ處分ス
 ヘキコトヲ促シタルナリ而シテ當時警保察ハ司法省ニ屬シタ
 ルモ以上ノ如キ事情アルヲ以テ内務省ノ設立ト共ニ省内ノ一
 察ニ移管セラレ是月十五日東京警備ノ爲メニ別ニ東京警視廳
 ヲ置キ川路ヲ大警視ニ任シタリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治七年正月七日

(大久保家藏)

昨日御懇答篤ト一見今日條公示談之處同公ニモ判然決定先以安心候

乍去三木中條公共大同小異候條明日退 朝愈來臨御頼申入候委細
筆頭ニハ難盡候

一今朝北代忠七入來ニ當今形勢ニ付ハ東國一体ニナカラ庄内
ノ如キ類リニ薩人依頼ニ旨趣有之ニ付ホキ萬一心得違等致シ一度
動キ立候ハ、東北一体ニ御手煩と存候條かねて貴卿大隈ハ申立置
候开拓云々特別ニ譯ヲ以テ御沙汰被下候様申居候子細ハ不承候得
共右取行候ハ、大ニ可然物有之旨ニ付無御助才存候得共厚ク御注
意可有之事と存候

一静岡縣參事南部某御用召ニ出京候此人若シ轉免ニ至リ候ハ、地
方官中餘程ニ議論有之候旨ニ候同人勉勵盡力敢テ可及物無之候處
勝山岡等之人々ヨリ静岡俗吏竊ニ讒ヲ構ヘ候由類リニ承リ候元ヨ
リ是ハ不取留事眞偽不存候ニ付御當テニハ不相成候得共内務省被
置候始メ專ラ貴卿ニ任セニ付御心得迄申入候間御高慮可被下候

一家祿奉還六個年分云々ニ義着手ニ付ホキ地方官第一ニ勤務ニ付各
參事ハ御沙汰ニ事昨冬も評議ハ有之候得共未タ告諭出來不申是ハ
早キ方可然哉と存候

一地方官集會ニ事章程出來候筈又御見込も可有之候得共前條ニ事も
有之外ニモ色々承リ候ニ付ホキ一度早ク御集會可然哉ニ存候假令
集會ハ遅ク相成候共何月集會云々御布令大ニ根本被立候思召貫通
候得キ可然哉ニ存候

一今日德卿ヨリ内談御用途内ヨリ云々可然奉伺候獻金ニ分ハ小生ニ
ハ其志被爲取一旦ハ御返却可然哉三條ニモ同意ニ候内々御談シ申
入候

一魯使節人體誠苦勞候貴卿如何ニ御願ニホキも決シテ不被行條公ニモ
殆ント心配被致候尙厚ク御思慮明日極内ニ御見込承リ度存候此
事一日モ早ク御發シ有之度尤今一應御前ニ御評議使命ニ次第御

委任之廉々御書取出來不仕候も夫不相濟是モ兩三日ハ可相懸事と
存候類リニ被差急候事ニ候萬事明日夫御懇談可申承候得共一筆如
此候也

一月七日

具 視

大久保殿

七八六 黒田清隆への書翰

明治七年正月六日

(黒田伯爵家藏)

【按】魯國ニ使節派遣ニ關シ榎本ノ意見ヲ聞知センコトヲ依頼
シタルモノナリ

昨日夫態々御出相願候得共外客よて不盡心事候別段之義ニハ無御坐魯使
節之事少々勘考も有之候得共時宜ニ依ルハ過日御内話承候通榎本氏から
ての外ニ見込之人體も無之就夫同人旨趣如何ニ可有之哉兼北地之事
ハ自任之譯ニて殊ニ國難ニ處スル之心底願意有之筈よて可疑廉も無御坐

候得共全體之見込樺太島之處分何れも目的相立候や其邊之處御咄申承度
所存ニ御坐候連も今般之使節ハ平凡之人物よて之決而任せられ申ましく
与愚考仕候御模様次第ハ同人ハ御寛話右邊之見込勿論即今之形勢如
何ニ目的を立候や貴兄御勘考ヲ以御聞取被下候得ハ仕合ニ御坐候乍去同
人心事兼御承知之事に候得夫別段御咄合ニも及ましく候○篠崎一條
ハ若御着手之御見込相付候ハ、急ニ御取計奉願候乍去是も推手を出し
心配顔ヲ見せ候ハ却而圖ニ乘り候も難圖其邊夫可然御取捨可被下候假
令歸縣いたし候とて何程之事も有之ましく与存候○樺太處分之義今日御
内話申上候通之行懸リニ相成居候間是非近日中ニハ結末相付候考ニ御坐
候就ハ兩三日之間ニ貴兄條公ハ御出之事御談申上候含メ御坐候間是ハ
猶御直談可申上候付左様御承知可被下候○昨日御内話申上候廟堂上云々
之事件誓而餘人ハ相咄候義も無之貴兄ハ此節之事初發ハ御内談之行懸
りも有之乍不本意吐露仕候義ニ御坐候別段申上ニ不及事なるら左様御得

心被下候様奉萬願候榎本にも使命云々之事々未定之事ニ付御扣置可被下候是も乍餘計爲念申上置候

右昏上ニ申上候義も無御坐候得共昨日御咄殘候故乍卒爾大略申上度如此御坐候餘ハ期拜眉候頓首

正月六日

利通

清隆高兄

【解説】當初利通ハ自ラ魯國使節ノ任ニ膺ランコトヲ乞ヒシモ政府ノ事情ハ到底利通ノ使節タルコトヲ許サ、ルモノアリ是ニ於テ利通ハ曩キニ黒田ノ推薦セシ開拓中判事榎本武揚ヲ適任ト認メ猶ホ榎本ノ樺太問題ニ對スル意見ヲ聞知スヘキコトヲ依頼セルナリ以テ如何ニ征韓延期ノ原因タル樺太問題ヲ解決セントセシカヲ知ルヘシ篠崎ハ五郎征韓論者ノ一人ナリ

【参考】其一 黒田清隆より大久保への書翰 明治七年正月六日 (大久保家藏)

尙々兩永山モ小生ニ欺カレタナソト坂元兩日中ニ咄ストノ事モ有之畢竟副島ノ煽動ハ明證仕居候也

前文略ス

借テハ坂元氏云々モ畢竟樺太事件全ク掛念ナク事済ミ誓テ違ハサルト後來之處モ老西郷君約束モ立置キシト其外段々煽動スルハ副島氏ニ間違ハ有之間敷彌浮説等敷モ無之斷然副島氏ニ御詰問可然ト存候大方三十日前ノ寺島伊藤同氏へ説キフセラレ或ハ同氏魯公使へ三十分字間計リニ論破サレシト又夫英國水師提督へ何カ御依頼取納政府ヨリ取返ヘスノ何ソト實ニ千秋ノ遺憾ニ御座候乍然老西郷氏ノ名ヲタバカリ書生輩等ヲカキマヌルハ多分間違サルト愚考仕候振切ツテ政府ノ手順相立御實行偏ニ奉伏冀候眞ニ同氏負借可笑和尙ノ名ヲカルハ不屈至極ニ御座候此旨取敢ヘス早々敬白

一月六日

黒田

大久保君閣下

【参考】其二三條公より岩倉公への書翰 明治七年正月七日

(岩倉家文書)

御安全奉賀候然々樺太混雜事件ニ付副島種臣を警保坂本は談話之事有之頗不都合之次第ニ付外務卿は被命御糺し相成候ハ、今日一同評議仕候明日御參ニ候ハ、大久保を御聞之上寺島へ御指令奉願候依テ此段得貴意置候也

一月七日

右事件始末ハ筆紙ニ認メ兼候間簡略仕候

岩 倉 公

實 美

【参考】其三黒田清隆より大久保への書翰 明治七年正月八日 (大久保家藏)

前文略ス借て々本文内密榎本簽次郎見込承候處勿論邦家之爲死力を盡し御奉公仕るハ兼而懇禱之事又使節云々之論よも次第順序も有之初め公使も懸合手盡テハ又彼レ外務卿も懸合術計盡果て斷然決策之

日より使節之役ニて不容易事ニ付行れんを決戦之格悟ニ無之候て

去迎も六ヶ敷舊幕時代度々魯シヤへも使節も出れとも全く無益ニ屬し國辱と罷成る計ニて實ニ遺恨千萬との事ニ付又外國の例を見ても頭て使節の重なる事論を待たも彼是見込之咄も承り申候間取敢へま右御届申上候書餘拜青奉期候敬白

一月八日

黒 田

大久保大兄閣下

二伸本日坂本氏之論も全く聞分けも無之むぢやあ事ニて矢張右之論を以て條公切迫と申上げ必を格別ある事々有之間敷存申候間決して御動搖無之様偏ニ奉伏冀候外ニ不審々

天皇陛下ニ乞ヒ眞劍勝負せるとの暴論兼テ副島板垣の口實歟と邪推仕候只管條公杯動搖有之々必竟ケ様之事より疑あき事ニ御座候返ま〜も一日も早く御實行相舉り盡く疑團を解度偏ニ奉合掌候

也

七八七 吉田清成への書翰 明治七年正月六日

(吉田子爵家藏)

【按】大藏省ヨリ内務省ニ轉任セシムヘキ人撰ニ付キ吉田ノ書ニ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候昨日々御尋被下辱奉存候扱大隈卿へ御示談之形行詳細被示聞逐一拜承別段異論も無御坐候得共縣官へ轉任等之事猶厚談合之上からてハ御同意ト申譯ヨハたり兼候尤十日迄ヨチ内務開店ハ無相違爲運候所存ニ御坐候兎角明日ハ暫時ニ候へ共參 朝旁大隈卿へも打合せ候合ヨ御坐候隨分憤發之趣大慶ニ存候乍去大藏大丞ヨハ是非さつありたる者を御採用無之而々相濟ましく卿々今日之事務ハ相辨可申候へ共決る御安心被成候而々不可然与存候先御則答まで艸々如此餘々拜接可申述候頓首

正月六日

利通

清成様

【解説】吉田ハ豫テ利通ヨリ内務省官員人撰ニ關スル依頼ヲ受ケシヲ以テ大隈大藏卿トノ間ニ盡力スルトコロアリソノ經過ヲ利通ニ報シタルニ對シ答ヘシナリ

七八八 利和・伸熊への書翰 明治七年正月七日

(大久保家藏)

【按】米國留學中ノ兩兒へ學資ヲ送り且ツ夏期休暇ヲ利シテ歸朝スヘキ旨ヲ通シタルモノナリ

一筆申入候各相揃堅固被成超歳珍重ニ至ニそんし候小子大々んき相勉候間懸念ヨサされましく候○縣宿元ミなく無事ニ由まハく一左右も有之候是又少もあんし申ましく○高橋氏着直左右もくじしく承り且書狀も遣され一見大安心ヨサし候其後も書狀もたしるよ相とゞき一々披見ヨサし候折角勉強ニ由尙此上油斷有之ましく候○先書ヨ申遣候通御方かとも

當夏休業までニ一應歸朝被致候様相決候付左様承知其内猶又勉強是非學
ひ掛て候事ハ成就被致歸朝無之候ゑ不相濟候就ゑ此内より羅旬語相
初メ候由被申遣候得共當夏歸朝ニ相成候得ハ無餘日候付取止メ候ゑ外ニ
課業專ニ勉強可被致候

○高橋新吉殿も又々當月中二月ニ懸自分ニ渡米之筈ニ付同人ハ歸朝之
事等くゑしく相頼遣候付左様承知可被致候尤同人ゑも別紙被遣候付被申
越候筈ゑとんし候○此節學費金米金五百八十五弗餘兩人ハ差遣候付相請
取配分可被致候委細ゑ高橋新一殿ハ頼遣候○前田氏も未出府無之多分不
遠内ニ出府可有之候必ス高橋氏同船ニ渡米可有之候○當地別段相ゑ
り候事も無之出火等ハ度々有之候本丁黒丁邊焼失又増上寺本坊も焼失ゑ
し候當年と成候處元日ゑ雪降ゑて別ゑ寒ク日本家ニゑハ其地ゑとより
ハ返ゑ寒キ様ゑ有之候○早崎氏兄弟山田吉太ゑとも別ゑ元氣海軍學校ニ
ハ勉強有之候

右一左右旁如此御坐候尙追々可申越候也

明治七年戊正月七日

利通

大久保利和殿

牧野伸熊殿

人々

【解説】前田氏ハ獻吉高橋新一ハ新吉ノ弟ナリ又早崎氏兄弟ハ

利通ノ義弟タル七郎後海軍大佐源吾後海軍少將ニシテ山田吉太ハ甥ノ

彦八後海軍中將ナリ

七八九

岩倉公への書翰

明治七年正月九日

(大久保利武藏)

【按】坂元等上申ノコト及ヒ久光公ノコトニ付キ具申シタルモ

ノナリ

今朝々尊書被成下候處來人中御返詞も不申上甚恐縮ゑ至奉存候扱昨日警

保察助坂元上申之末大ニ趣意汲取違ひ居更ニ今日伺之趣有之斷然大臣殿より御答相成候付自ら御直ニ御承知有之候事与奉存候逆も今日之形勢ニ相成曖昧打過候之決之相濟不申候付益御据リ無之ハ相成不申候間左様御承知可被下候將又久光一條昨日ちらと申上置候通ニハ今朝奈良原參之面會不相調候處別番書殘し有之其儘差上申候間御一覽可被下候何せい細々明朝拜趨之上可申上候之し明日も表向差出候都合ニハ決之不至事与存候得共若思食も被爲在候ハ、宜舖奉願候別段御心配被下候ニハ及不申事与奉存候小臣も今朝已來警保察之事ニ付正院出席も十二字ニ相成内務省之方も早目出席不致候ハ相濟不申候處漸々三字比ニ出省相調候次第御坐候此段申上度如此御坐候頓首

正月九日夜

利通

具視公閣下

【解説】警保助坂元純熙ハ西郷等ノ一味ナレハ八日利通ヲ訪ヒ

樺太問題ノ解決セシ由副島前外務卿ノ言明スルトコロナレハ前參議ヲ復職シテ征韓問題ヲ斷行セラレンコトヲ三條岩倉兩公ニ言上セシニ十日決答スヘキノ言辭ヲ得タル旨ヲ告ク利通ハ樺太問題ノ決着ニ至ラサルコトヲ説キシカ是日坂元ハ黒田ト共ニ再ヒ利通ヲ訪レ誤聞ナリシ旨ヲ述ヘテソノ疎漏ヲ謝シ更ニ國分友諒ト共ニ三條公ニ謁シタルニ公ヨリモ述ヘラル、アリシナリ又久光公ハ曩キニ内閣顧問ニ任セラレシモノノ意見容レラレサルヲ以テ是日辭表ヲ提出セリ依リテ奈良原繁等之ヲ憂ヒ利通ニ訴ヘシカハ奈良原ノ書ヲ岩倉公ニ呈シテ願書ヲ聽許セラレサランコトヲ具申シタルナリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治七年正月九日

(大久保家藏)

令一見候昨日坂本上申之末云々今日條公ヨリ巨細承知致し候御來文中益御据リ無之ハ相成不申との事ハ素リ御同意候得共同人ノ上ニ

付るハ了解致しの候義も有之候ニ付明朝可申承候

久光卿事何も承候是も明朝面上可申承候得共今日頓ニ右様ニ立至リ

候事頗ル不審之次第ニ候

此節之義小生今日不參も實ニ不心成候得共兩三日不工合不得止事ニ

候内務省も今日御開相成候由先以恐悦存候嚙御繁用と令推察候早々

以上

一月九日

具 視

利 通 卿

尙々明朝御參朝掛八時半御來臨之事と存候也

七九〇 内務省職制章程案

明治七年正月

(内閣公文録)

【按】内務省設立ニ付キコレカ職制等ヲ規程シテ三條公ニ上レ
ルモノナリ

内務省職制及事務章程

凡官ニ職制アル以テ其權限ヲ知ルヘク務ニ章程アル以テ其統紀ヲ明ニス
ヘシ於是諸官職掌ヲ奉シ各課程限ヲ守テ政治綱目并舉條理秩然タルヲ要
ス

第一條 内務省ハ國內安寧保護ノ事務ヲ管理スル所ナリ

第二條 省務ヲ支分スル者

勸業寮 警保寮 戶籍寮 驛遞寮 土木寮 地理寮 測量司 記録課
庶務課

第三條

卿

第一 本省及各寮司ノ官員ヲ統率シ省中一切ノ事務ヲ總判スルヲ掌ル

第二 全國人民ノ安寧ヲ計リ戶籍人口ノ調査人民産業ノ勸奨地方ノ警
備等總テ其掌管ノ事務ニ於テハ正院ニ抵リ大臣ニ乞テ其現務ノ便否

ヲ明辯スルヲ得ル而シテ其事務ヲ調理スルニ於テハ天皇陛下ニ對シテ擔保ノ責ニ任ス

第三 特旨解赦恩典ノ事アルヲ奉行ス

第四 事務章程ニ照シ制可ヲ乞ノ條ハ上奏シ其專任ヲ得ル條ハ便宜處分スルノ權ヲ有ス

第五 各寮司ヨリ具狀スル事務ハ其緩急ヲ審案シ之ヲ決判取捨スルノ權ヲ有ス

第六 闕席スル事アルトキハ輔ニ命シテ其事務ヲ代理令ムルノ權ヲ有ス

第七 省中ノ官員奏任以上ノ進退ハ太政官ニ於テ命スト雖モ之ヲ黜陟スヘキハ其要旨ヲ具狀シテ命ヲ乞フ

第八 判任以下ハ其能否ヲ監別シ丞及寮司頭正ノ具狀ニ比較シテ黜陟ヲ專行ス

第九 各地方ノ官員奏任以上ノ進退黜陟ニ關與ス

第十 省中奏任以下ノ官員ヲシテ地方ヲ巡察セシムルノ權ヲ有ス

大輔 少輔

第一 職掌責任卿ニ亞ク

第二 卿ノ代理タリシ時ハ其意ヲ體認シ一切ノ事務ヲ總理スルヲ要ス

第三 省中掌管ノ事務ニ於テハ卿ト共ニ正院ニ抵リ其現務ノ便否ヲ明辯スルヲ得

大丞 少丞

第一 卿ノ命ニ從テ省中各課ノ事務ヲ管理ス

第二 各課ノ事務ニ付テハ其擔當ノ制限ニ依リ卿ニ對シテ之ヲ調理スルノ責ニ任ス

第三 省務ニ關スル公文受付ヲ提掌ス

第四 所管ノ月報考課狀ヲ檢閲シテ卿ニ呈ス

第五 所管判任以下ノ勤惰ヲ正シ各課ノ事務ヲ獎督シ其能否ヲ監別シ
テ黜陟ヲ具狀ス

大錄 權大錄 中錄 權中錄 小錄 權小錄

第一 各課長ニ從テ其事務ヲ處辨ス

第二 凡文書ヲ受付往復スルハ都テ課長ノ指揮ニ從フ

本省事務章程

第四條 戶籍ノ法ヲ設ケ警邏ノ規則ヲ定メ或ハ之ヲ更正スル事

第五條 貧院病院ヲ創建シ其方法ヲ設立スル事

第六條 賞典ノ制ヲ定ムル事

第七條 農業學校并勸農會社ノ制ヲ定ムル事

第八條 州郡ノ經界村市ノ制置及土地ノ名稱ヲ更正スル事

第九條 各地方廳ノ位置ヲ變シ或ハ支廳ヲ廢立スル事

第十條 地方官廳費及民費ヲ増減スル事

第十一條 寮司ヲ廢置シ職制章程ヲ改定スル事

第十二條 奏任以上ノ官員ヲ進退スル事

第十三條 道路川海堤防橋梁修繕ノ事務及法則ノ事

第十四條 内外形乘船規則ヲ立ル事

第十五條 山林法則及繁息ノ道ヲ施行スル事

第十六條 官員ヲ増減スル事

以上各條正院ニ於テ裁決スルヲ恒トスト雖モ其制度法律規則ノ考案
ニ至テハ其意見ヲ上奏シ制可ヲ經レハ起草スルヲ得

第十七條 國內取締ニ關スル事務并選卒消防夫ノ支配ノ事

第十八條 全國ノ記錄ヲ保存スル事

第十九條 古跡ヲ保存スル事

第二十條 郵便廻漕ノ事務ヲ支配スル事

第二十一條 演戲遊觀所取締ノ事

- 第二十二條 定規アル賞典ヲ施行スル事
- 第二十三條 成規アル夫食種粃農具代等ヲ貸付スル事
- 第二十四條 金券發行會社ヲ除クノ外諸會社設立ノ準允ヲ與ル事
- 第二十五條 歸籍沒籍及棄兒養育等ニ係ル地方ノ申牒ヲ査閲シ既定ノ恒例ニ照シテ指令スル事
- 第二十六條 村市ノ經界及田畑山林原野沮澤湖沼港津海岸等管轄中或ハ他ノ管轄ニ交渉スルヲ検査スル事
- 第二十七條 田畑山林屋敷地ヲ變シ潰地及亡所或ハ起返開墾其他地所拂下等ノ類土地ニ關スル地方ノ申牒ハ成規恒例ニ照シ處置スル事
- 第二十八條 非常ノ災變ニ由リ流亡セシ人畜土地家屋ヲ調査スル事
- 第二十九條 災變ニ遇フ窮民ヲ規則ニ照シテ救助スル事
- 第三十條 生理ヲ安寧ニスル諸法ノ施行及其安寧ニ付テ諸省ニ文書往復スル事

- 第三十一條 定額ヲ以テ省中一切ノ諸費ヲ辨給スルヲ確設スル事
 - 第三十二條 掌管ノ事務ニ付テ推問照會督促等ノ文書假令地方ニ通シテ布達スル事ト雖モ便宜往復受付ヲ得ル事
 - 第三十三條 月給俸給旅費其他買辨品等ノ代價及修繕ノ經費ニ至ル迄一切ノ公費計算ハ其分類ヲ詳悉シ毎月毎歲大藏省ノ成規ニ照準シ一覽表ヲ製シテ上呈スル事
 - 第三十四條 省中事務官省各局ニ交渉スルモノハ其省ニ照會シテ後執行スル事
 - 第三十五條 凡省中ニ於テ處分スル事務細大トナク毎月毎年ト區別シテ詳明ナル月報考課狀ヲ上呈スル事
- 以上各條省中專任トス
- 内務省職制及事務章程恪守遵奉其職ヲ盡ス可シ若シ本省事務舉ラサルアレハ臣謹テ其責ニ任ス可キ也

内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

【解説】前年十一月廿九日利通ノ參議ヲ以テ内務卿兼任ヲ拜命スルヤ省ノ職制及ヒ人員ヲ調査セシカ是日漸ク事務ヲ開始スルニ至レリ本書ハコレ以前ニ於テ裁可ヲ仰クヘク三條公ニ呈セシモノニシテ尋イテ多少條文ニ訂正ヲ加ヘ十日ニ公布ヲ見タルナリ猶ホ開設當時内務省ノ要路ニアリシ官員ハ大丞タル林友幸・前島密・河瀬秀治・松田道之・杉浦讓・少丞タル武井守正・松平正直・新田義雄及ヒ大警視川路利良等ナリキ

七九一 岩倉公への書翰 明治七年正月十一日

(大久保利武藏)

【按】警保寮動搖ノ事情ト久光公ノコト及ヒ榎本ノコトニ付キ具申シタルモノナリ

拜啓仕候然々昨日内務省御用濟警保寮へ出席司法省が次渡相濟一體之様子承候處格別之事も無之選卒辭表差出候人員凡百餘名免職以たし跡を則人數繰込ミ無差支手筈相調申候警視初選卒鹿兒島人々凡八九百人餘之内百有餘名免職にて假令此上波及いさしるも二百人内外ニ止り可申見込之由川路警保助申居候同人確乎として擔當諸事無手拔勉勵仕居候付此上之處格別御配慮被爲在程之義を有之ましく奉存候間先御安心可被下候坂元國分ハ病氣にて引入居候由誠ニ不堪抱腹次第御坐候○昨晚濱町邸へ參様子承候處奈良原海江田も十分盡力切諫仕候得共久光頑乎として決心自分ハ自分之考之と言ふ勢ニ終る家扶某ニ命し辭表差出候を全ク出抜キニ逢候姿ニ御坐候今更無致方候へ共まゝり不足申入置扱愚考ニハ多分辭表御聞届有之ましく必ス明日ニハ別段厚
御慮ヲ以被命候義ニ付辭表之趣不被 聞食与之御沙汰可相成歟も難圖其節々十分盡力之見込有之哉与申入候處其節々猶邸中一同申合必死盡力可

仕之事ニ付畢竟其方抔久光を引出したる今日ニ相成候る力ニ難及ナト、申候る夫

朝廷に對し候るハ勿論天下ニ對し何之面目ある是非人之手を假らば憤然盡力引留可申与且諭シ且勵シ置申候就るハ自ら思食可被爲在等あるら若御引留相成候御決着ニ候ハ、明日中ニハ手強き方斷然御沙汰相成候様奉願候幾回辭表差出候るも御採用有之候得え獨行脱走々出來不申候付此上ハあまやゝぬ様御壓伏可被下候○榎本一條昨夜中黒田に示談之合ニ懸合候得共行違ひ候付今日中内話可仕含へ御坐候然處明日ハ御決定出來兼候歟も難圖ニ付

親臨奏聞之條ハ外ニ御取調置可被下候臺灣事件今日御聞取有之候ハ、其顛末言上相成候るも宜ク諸省定額之事も大隈も申居候付右御評議有之るも可然歟与奉存候乍去榎本一條も是非今日中決著相付明日御評議より御決相成候様精々盡力仕格護へ候得共爲念申上置候

右條々爲御心得一應申上置度如此御坐候太政大臣公に別段申上置度候得共今日御面會之趣ニ承知仕候付宜ク被仰傳被下度奉願候頓首

正月十一日

利通

具視公閣下

【解説】警保寮ハ前日司法省ヨリ内務省ニ移管セラレシカ警保助坂元純熙ハ征韓ニ關スル自己ノ主張容レラレサルヲ以テ部下ノ選卒百餘人ト辭表ヲ提出スルニ至ル是ニ於テ川路利良ハ之ヲ免職シテ別ニ補充スルニ至レルナリ又久光公ノ内閣顧問辭職ノ議ニ付キ奈良原繁海江田信義ヨリ再考ヲ請ヒシモ公肯ンセス遂ニ公然辭表ヲ提出セシカハ利通ハ直チニ奈良原等ヲシテ公ヲ諫止セシムヘク諭セルナリ又榎本魯國派遣ノコトハ十日ノ閣議ニ於テ決定セリ

【参考】三條公より岩倉公への書翰 明治七年正月十日

(岩倉家文書)

彌御清穆奉賀候然え過刻御内談有之候事件即愚存申陳候通方略中之
 處置ニ候ハ、愚存も無之乍去樺太割地之事ハ諸參議建言之通鄭重反
 覆應接を重祿候上不得止之處置ニ不出候るえ天下後世之御言ヒ譯も
 有之間敷如何よも大事と存候間前議之順序ハ逐々之運ひニても割地
 之事ハ幾應も談判ニ念ヲ入候事ニ是非仕度候無左候るえ直ニ割地決
 約應接ニテハ極而後害有之事と存候間大久保ニも其邊ニ落着相成候
 様御盡力肝要と渴望仕候右前刻拜談之通ニ候得共猶爲念以紙面申陳
 候篤御勘辨希存候御互之處ニ而熟談不相整候小生も決して十八日後
 之議を動候念無之候得共樺太之件ハ實ニ大事と苦慮ニ不堪より異論
 申候事ニ候偏御詳察希仰候

一月十日

此書狀御他見必ら及御用捨奉願候

岩倉右府公

實美

七九二 黒田清隆への書翰 明治七年正月十一日

(黒田伯爵家藏)

【按】榎本武揚カ魯國使節ヲ内諾セシ旨黒田ヨリ報シ來レルニ
 答ヘタルモノナリ

拜讀仕候扱御願申上候榎本一條早速御談判終ニ承服相成候由先以安心仕
 候尙い曲々拜眉可申承候乍御面倒明日え正院迄御出被下候得え別而仕合
 ニ奉存候此旨御則答のミ如此御坐候拜首

正月十一日

利通

清隆様

七九三 黒田清隆への書翰 明治七年正月十二日

(黒田伯爵家藏)

【按】榎本ヲ派遣セシムヘク決定セシ旨ヲ報シタルモノナリ

過刻御談申上候榎本一條別御内談被下候趣承知仕候然處今日御評議有之

海軍中將ニ被任候上全權公使被命方可然与之事ニ相決候子細ハ武官之方
外國ニ對してハ大ニ引受も宜ク各國ニ亦も其例も不少ニ付其通御内定有
之候今朝夫小子存慮ヲ以御咄申上候事ニ有之御評議之上前條通り御内決
少々相違いたし候へ共其段ハ今朝御断も申上置候付猶又當人ハ一應御内
話被下候様御願申上候決而異存之儀ハ有之ましく候得共爲念一應御引合
申上候何分御答可被下候此旨早々頓首

正月十二日

利通

清隆様

【解説】是日閣議ニ於テ榎本ヲ海軍中將ニ任シ魯國全權公使ヲ
命スルコトニ決定シタルナリ

【参考】黒田清隆より大久保への書翰 明治七年正月十二日

(大久保家藏)

過刻御下命早速榎本武揚へ示談仕候處決シテ異存無御座候間至急御
議定相成様偏ニ奉伏冀候此旨早々頓首

一月十二日

黒田 拜

大久保君閣下

二伸前外務卿へ「フラロースキ」内話一條後ヨリ呈候也

七九四 黒田清隆への書翰 明治七年正月十二日

(黒田伯爵家藏)

【按】榎本派遣ニ付キ黒田ノ書ニ答へ重ネテ前書ノ意ヲ榎本ニ
通センコトヲ依頼シタルモノナリ

過刻夫榎本氏一條ニ付御昏面被下今朝御内話之義同人ハ御引合御請可致
決答之由然處今日御評議之上武官ニ亦被差出候方引受も宜ク且各國其例
も有之候付海軍中將ニ被任追而全權公使被命候方可然与之事ニ御内定相
成候付乍御面倒猶一應御内話被下度決而異儀無之事与存候得共爲念過刻
御返書ニ亦申上候右相違候やいゝと案候付更ニ此段御頼申上候明日夫
是非御伺之上臨時御呼出ニ亦も被仰付度存申候艸々如此御坐候頓首

正月十二日夜

利通

清隆様

〔解説〕板本ハ十四日ニ至リ海軍中將ニ任セラレ十八日特命全權公使ヲ兼ネ樺太問題ヲ交渉スヘク命セラレタルナリ

七九五 華士族授産に關する伺書 明治七年正月十四日(内閣公文録)

就産營業之儀ニ付各府縣へ相達度伺

士族薄祿少給之者就産營業之道相立候様至仁之御趣旨ヲ以先般御布告相成候處僻遠之地ニ至ル迄御趣意柄充分通徹致シ兼候掛念モ有之候ニ付別紙之通連署ヲ以各府縣へ懇達仕度兩省協議之上此段相伺候也

明治七年

大藏卿大隈重信

内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

(原朱)
伺之通 明治七年一月十四日

〔解説〕廢藩置縣後ニ於ケル華士族授産ノコトハ利通ノ亦深ク留意セシトコロニシテ九年内務省内ニ授産局ヲ設ケタル如キ猪苗代湖ノ疏水ヲ利セル開墾事業ニ士族ノ移住ヲ奨励セル如キ富岡製絲場新町屑絲紡績場及下總牧場等ノ政府直營ノ事業ニ於テ士族ノ子女ニ講習ヲ授ケ實務ニ従事セシメタル如キ如何ニ内治ニ努メタルカラ知ルヘシ

七九六 華士族授産に關する達案 明治七年正月 (内閣公文録)

〔按〕薄祿少給ノ華士族授産ノタメ保護ノ途ヲ立ツヘキコトヲ地方官ニ令シテ徹底セシメントセルモノナリ

明治六年四百二十五號太政官布告ヲ以華士族營業之自由ヲ被許候ヨリ追々自營之目途相立候者モ不少趣ニ候得共薄祿少給之者ハ僅ニ旦夕之糊口

ニ充ツルニモ差支候儀ニ付就業之資本可辨道無之往々坐シテ困窮ニ陥リ候者モ有之哉ニ相聞其情況深ク御啓察被爲在目今國費御多端之折柄ニ候得共出格之譯ヲ以規則之通家祿奉還營業志願之者共エハ資本金下賜且官有地之儀ハ士民之別ナク相當之價ヲ以拂下ケ可相成筈之處少給之者共授産之爲メ特ニ低價ヲ以拂下被成下候ハ新ニ不慣之業ヲ營ミ其資本ヲ失ヒ候テハ忽チ生活之道ニ差支候ニ付不動産ヲ與へ就業安堵セシメ永ク生理ヲ保チ候様ニト至仁之御趣意ニ付地方官ニ於テモ厚ク此旨ヲ體認シ願出之モノ有之候ハ、本人目途モ篤ト承リ糾シ一旦ノ浮利ニ趨ラス眼前之僥倖ヲ求メス著實ニ力食之道ヲ盡シ候様曉諭ヲ加へ御趣意貫徹致候様可被取計此旨爲心得相達置候事

明治七年一月

内務卿大久保利通

大藏卿大隈重信

財務第四號

寫濟

明治七年一月十三日

同十四日

大臣

○

○

○

○

○

○

○

○

○

參議

○

○

○

内務大藏兩省伺之趣御閉届相成可然与存候依之御指令案相伺候也
伺之通

七九七 黒田清隆への書翰 明治七年正月十五日

(大久保家藏)

【按】來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

甚御面倒恐入候得共明朝九字比御入來被成下候義相叶申ましくや遮る御談合申上置度事件有之付此段艸々頓首

正月十五日

利通

清隆様

七九八 木戸孝允への書翰 明治七年正月十六日

(木戸侯爵家藏)

【按】選卒増員ノコトニ付キ木戸ヨリノ書ニ答ヘタルモノナリ
 尙々何モ近日中參堂旁相伺度奉存候亂妨人モ未迄と確證ヲ得不申
 候へ共外ニハ氣寄モ有之趣ニ御坐候舊會津人何分イフカシク御坐候
 拜讀仕候昨夕ハ態々御光駕被下御懇談之趣別々難有奉厚謝候扱即今形情
 ニ付猶又御高論之趣逐一拜承御同意至極ニ奉存候選卒之儀ハ則今日川路
 も呼寄速ニ撰擧之手筈ニ致相談明日中ニハ御沙汰相成候様爲運度候付山
 口縣ヨリハ是非二百人位差出相成候様仕度候付表向御達有之候ハ、自ラ
 御頼談申上候含ニ付何卒御尊之通御高配之程奉願候且又目下御處分之義
 モ無御猶豫御斷決云々之一條御尤奉存候自ら今日如此之時宜ニ及候ハ
 條公之御決着第一之事ニ而自然思食も可被爲在義ト奉存候小子ニハ今日
 迄之行懸御觀察可被下一步も動らし候心底無之初發ヨリある困難ハ期
 候事ニ而一身之あらん限ト獨決仕候此末之處熟觀仕候も千態萬態如

何ニ立至リ候歟も難圖是非此ニおひてハ兩斷之決ニ出候外有御坐ましく
 愚考仕候間猶又條公にも御申上被下候様奉伏希候今日ハ同公拜趨可仕存
 候付篤与相伺候含ニ御坐候此段拜復迄艸々如此御坐候頓首

正月十六日

利通

孝允老臺下

猶々近縣之儀ハ不取敢告諭も仕猶別段人も差出置候付左様御承知可
 被下候來人中亂筆御高免可被下候也

【解説】是ヨリ先キ警保寮官員及ヒ警吏ノ征韓論破裂後官ヲ辭
 シ歸國セシモノ多ク爲メニ治安ノ維持ニ支障ヲ生シ遂ニ十四
 日岩倉公赤坂喰違遭難ノ如キ不祥事ヲ生スルニ至ル利通ハ大
 ニ之ヲ憂慮セシカ會マ木戸來訪ノコトアルヲ以テ選卒増員ノ
 コトニ付キ意見ヲ述ヘ山口縣出身ノモノ二百名ヲ以テ補充セ
 シコトヲ依頼セリ然ルニ木戸ハ是日書ヲ利通ニ寄セ山口縣ノ

外ニ和歌山縣ヨリ百人神奈川縣ヨリ二百人ヲ徵集スヘキコト
ヲ告ケ猶ホ都合ニヨリテハ陸軍少將山田顯義ヲシテ治安維持
ノ爲メ應援セシムヘキヲ以テス利通乃チ之ニ答書シ大警視川
路利良ニ下命セシコトヲ報シ重ネテ山口縣ヨリ徵集ノコトヲ
依頼シ人心ノ動搖ヲ制シ政府ノ威信ヲ示シ治安ヲ保タンカタ
メニ木戸ノ盡力ヲ希望セルナリ

【参考】木戸孝允より大久保への書翰 明治七年正月十六日

(大久保家藏)

選卒云々御示之儀も承知仕候爰元ニ亦ハ御示之人數丈ケハ急ニ相集
り兼申候ニ付相集り候丈着手仕其餘ハ國元へ不申越候亦ハ不相成と
奉存候餘りまゝ長人而已こりニ亦も不可然候ニ付他よりも入れ組
候方可然奉存候肥前ニ亦も精選百人位ハ相とゞのひ候よし是又御命
しニ相成候ハ、如何私其手續も御座候ニ付思食次第早速相運ひ可申
候同志中評議も仕候處其中加奈川縣ニ選卒急ニ二百名も御呼寄せニ

相成候ハ、可然と奉存候餘程加奈川縣選卒ハ近來克相調居候よしニ
御座候選卒總長ハ飢肥之人ニ亦平部致朝と申仁尤丈夫ニ有之よしニ
御座候一昨日御内話申上置候通山田少將へも自然警保ニ御用御坐候
ハ、速ニ出勤可仕様相談置申候川路氏元より少しも御盡力御疎ハ有
之間敷御事と奉存候得共其本確乎と相締り不申亦ハ益其末ニ人心ま
ちまちと相成可申と奉存候今日密ニ承り候得ハ明日青松寺會津人會
盟仕候よし之趣も有之候よしニ御座候迅速御膝元ニ肅整仕候丈ケニ
運ニ御着手奉祈候山田一條紀州及加奈川選卒云々右三事何分ニ儀御
一答奉願候只今藝州鎮臺陣營放火と申風説も承知仕候山縣へ聞合せ
申候處彼も外出中ニ亦眞偽不相分候得共實ニ波及ハ難圖兎ニ角何事
も御手筈ハ迅速を貴ひ申候先ハ爲其草々頓首拜

一月十六日夜

孝允

大久保老臺

御内披

尙々司法省何分ニも氣脈速ニ貫通不仕而ハ總て何事も御手もつと
と相成候事不少付而夫今日之際必死此政府之命を奉し盡力仕候も
のを御登用有之候事御急務ニ而其上御損益ニ關係仕候事も不大形
付而ハ多言ニ而少々人ニハ是非被致候ものニ御座候得共才氣有之
事務ニもりしこく御座候間陸奥陽之助を司法へ出仕被仰付候而ハ
如何於愚考ハ當此際少しも有用之人物此政府ニ盡し候ものハ御登
用有之度萬禱仕候頓首

七九九 岸良兼養への書翰 明治七年正月十七日

(牧野家藏)

【按】鹿兒島縣裁判官ノ更迭ニ付キ報シタルモノナリ

愈御清安被成御奉務奉敬賀候扱鹿兒島縣裁判官之事色々ニ而埒明兼候乍
去明日ハ愈下命相成候由司法卿方承候付其上三好ハ御引合被下候様御

願申上候明後日御出會被下候ハ、可然与存候此旨早々拜首

一月十七日

利通

兼養様

猶々とふく中山も警視廳に拘留相成山本克丹羽某も同様之由ニ候
内々爲御心得申進置候也

【解説】岸良ハ當時司法大檢事三好ハ退藏ニシテ判事ヲ奉職セ
リ猶々書ノ中山ハ文久年間利通ト共ニ側役タリシ中左衛門ニ
シテ岩倉公赤坂喰違遭難ノ加害者タル嫌疑ヲ以テ拘留サレシ
ナリ

八〇〇 岩倉公襲撃人名覺書 明治七年正月十八日 (大久保家藏)

武市熊吉
島崎直方

山崎 則雄
武市喜久馬

四名昨夜及捕縛候旨警保察申出候

【解説】武市熊吉等ハ是月十四日夜岩倉公ヲ暗殺セントシ赤坂喰違ニ於テ襲撃セシモ事成ラス十七日捕縛セラレタルコトノ報利通ニ至リシヲ以テ直チニ三條公へ報セシナリ

八〇一 木戸孝允への書翰

明治七年正月十八日

(木戸侯爵家藏)

【按】邏卒増員ノコトニ付キ再ヒ木戸ノ書ニ答ヘタルモノナリ尙々斷然非常ニ處セラレ候云々之事昨日凡治定陸軍へモ御沙汰有之候付御安心可被下候賊も必入手可相成機も相見得候付是又確たる事ハ跡ヨリ可申上候此節之事三四之賊ヨリシテ大ニ波及も可有之決シテ平凡ニハ相濟申ましく被存候間用意手順第一之事ニ御坐候

愈御清安奉敬賀候然ハ昨朝ハ御投書ニ預辱奉存候邏卒増加之義昨日相決凡二千人位精撰加入之筈乍去縣々ヨリ呼立候得ハ往來日數も相懸候故差向之處ハ府下有合之人員或ハ最寄館林黒羽根邊等ヨリ五六百人之間取拔候様いとし度幸山口縣紀州ニハ御手續も被爲在候事故何卒御盡力被下候様奉願候尤今日山口縣ハ二百人和歌山ハ百人差出候様縣官ハ表向相達候付當地ニ出來候丈早々差出相成候得ハ別ニ仕合ニ御坐候跡ハ猶取調之上相達可申何分方向能相立候縣ニ十分撰舉行届不申候ハ却テ害を引候も難圖候間決テ迂濶ニハ達も出來不申猶深案ニ心得ニ御坐候○山田氏一條ハ未相決不申候付猶追テ御答可申上候間左様御承知可被下候右御回答ノミ乍延引如此御坐候鳥渡參堂旁相伺筈ニ御坐候得共別多用ニ乍思其義不相叶不本意至極ニ御坐候得共不惡御汲量可被仰付候艸々多罪

正月十八日

利通

孝允老臺下

【解説】十七日木戸ハ更ニ書ヲ利通ニ寄セ選卒増員ニ關スル廟議ノ決定ヲ促セリ利通ハコレニ對シ前日ノ閣議ニ於テ選卒二千人採用ニ決定セシモ各縣ヨリノ徵集ハ日數ヲ要スルヲ以テ府下若シクハ館林・黒羽根等ヨリ五六百人ヲ採用スヘク尋イテ山口縣ヨリ二百人、和歌山縣ヨリ百人ヲ徵スヘク既ニ公達セシ旨ヲ答ヘタルナリ書中ノ「山田氏」ハ少將山田顯義尙々書ノ「非常ニ處セラレ候」云々ハ萬一ノ際ハ陸軍ヲシテ助力セシムヘク陸軍省ヘ内達シタルヲ云フ

八〇二 黒田清隆への書翰 明治七年正月十八日

【接】樺太事件ニ關シ副島種臣トノ會見ヲ報シタルモノナリ今朝副島氏は參相咄候猶形行御談可申上候間後刻御入來被下度此旨早々

頓首

正月十八日

利通

清隆様

【解説】是ヨリ先キ坂元純熙等征韓斷行ヲ三條公ニ強要シソノ前提トシテ樺太事件ノ解決ヲ迫ルコレ副島ノ煽動ニ因ルトノ説アリシヲ以テ利通ハコレカ真相ヲ糺シタルナリ

八〇三 黒田清隆への書翰 明治七年正月十九日 (大久保家藏)

【接】酒田・米澤兩縣ヨリ選卒徵集ノコトニ付キ依頼シタルモノナリ

拜讀小楯一條度々御面働成上申候扱過日御内話申上候酒田縣一條々猶又御舍居可被下候同縣々此節選卒呼立候筈ニ處右精撰不致候亦まむちやニ差出候亦も込入候ニ付乍御面働誰々へ御談置被下候様奉願候米澤も同斷

ニ付是又御願申上候此旨乍序御願申上候尙面上奉謝候艸々頓首

正月十九日

利通

清隆様

八〇四 黒田清隆への書翰 明治七年正月廿日

【按】黒田ノ書ニ答へ再ヒ遷卒徴集ノコトニ付キ依頼シ猶ホ坂元國分兩人ヨリ三條公へ上申セシコトニ及ヒタルナリ

拜讀仕候まゐれと坂元子云々之昏面一覽返上仕候是ま早目之方可然愚考仕候

一酒田縣を遷卒云々之義願上候處近方縣を招募之義ハ固より着手相成候得共此節ハ凡人餘増加之筈よて差向之處ハ近方を呼立其餘ハ方向相立戰爭ニ相勤候縣を招募之心得よて右酒田縣を差向之用よ見込候譯よ無御坐候遠方ニ候得ま猶以早目達置不申候而ま手後を相成候間表通遠

方々心得よも可相成仍る兩日中よハ乍御面倒御引合置被下候様分る御願申上候置賜縣も同様御願申上候

一小楯一條を今日條公亭に同人出頭告訴之次第有之警保寮之内を同人の取糺し申候其後之都合相分不申候彼ノ中西ナル者を昨日及捕縛候築地連中

一舊臘坂元國分三條公の出頭之節云々之事誠よ意外ニ存候小子承候處よてハ前議ニ復スル与云事ハ決し而不相叶義よて奉職之上ハ今日を今日之處よて盡力いたし候外無之乍去西郷等之事ニおひてを猶見込も有之云々相答置候与之御咄を承居候多分少しを引違ひも可有之歟与存候得共其時分十日限与のいえる咄も有之實を不案ニ存候位ニ御坐候兎角高貴ある人ハ御案内通之事ニ有之是のミ晝夜心配仕候次第御親察可被下候右御答のミ如此餘を拜表可申承候艸々頓首

正月廿日

利通

清 隆 様

【参考】黒田清隆より大久保への書翰 明治七年正月廿日

(大久保家藏)

前文略ス借別紙之通坂元氏より到來候間左様御聞置可被下候
一本日御沙汰之酒田縣より徵募方云々委細拜承乍然愚考ニ差向
近縣元王事ニ勤勞之藩より至急御徵募可然と存候いつれ拜青細陳可
仕候

一只今小生親類村田林平ト申者不日歸縣暇乞として參り候咄ニ舊臘
三條殿へ坂元國分同道一同見込獻言仕候處實ニ尤ニ存候就ハ足下
共ニ必ス前參議復せしめ度念願歟實ニ忝し御當人思召も云々と被仰
聞決して口外致せなどの事ニて皆々難有奉存候謹て舊參議中復職一
日三秋の如く待兼ねたる云々内密相通し條公之處誠ニ危き事何共恐
入次第御諒察可被下候閣下ニも御當人如何御返答被爲遊候哉と御氣
遣ひの事も曾て拜承仕候事今更其證を得驚入申候爾後乍恐申迄も無

之候得共能々御注意有之御油斷なき様偏ニ奉伏冀候

一小楯内通云々相分り申候哉拜承仕度候事

一昨夜村田新八の會話愚存篤ト示談仕候間何レモ至當同意何れ拜青

細陳可仕候

右條々要用如此ニ御坐候早々頓首再拜

一月廿日

黒 田

大久保君閣下

二伸一日も早く非常之御手配有之表ニ夫平日從容たる處肝要ニ存
候周章動搖たる形勢ニ候へ夫必も彼レ其ノ隙を狙撃する例も有之
實ニ乍毎有之儘不憚御忠告申上候也

八〇五 木戸孝允への書翰 明治七年正月廿三日

(木戸侯爵家藏)

【按】木戸ヨリ面談ヲ求メタルニ對シ答ヘタルモノナリ

尊墨敬讀仕候まゝの今夕三四字比より弊宅の御來貴可被成候趣奉待候
小子社參上可仕處ニ大失敬之義ニ奉存候得共任御懇諭此段御請答艸々
如此御坐候何モ拜表ニ讓リ候頓首

正月廿三日

利通

孝允 老臺下

猶々退出四字少シ過候付四字半比ヨリ御來杖被下候得ま別る仕合奉
存候

八〇六 木戸孝允への書翰

明治七年正月廿四日

(木戸侯爵家藏)

【按】商法規則制定ノコト及ヒ三間正弘登庸ニ付キ答書シタル

モノナリ

高楮敬讀仕候昨夜ハ態々御來貴被成下段々御懇話拜承別る難有奉多謝候
扱商法規則云々之趣御高按御尤ニ奉存候右等ハ是非追々取調候合ニ罷在

候御案内通内務省モ創立之際ニ未一省之据りも付兼候位ニ候間凡治
定ニ至候得ハ必用ニ取懸リ候積ニ御坐候猶又御賢慮被爲在候ハ、無御伏
臆御示諭奉願候將又舊長岡藩士三間正弘御面會相成候由遷卒之義五十名
位相調候由別る仕合ニ御坐候實ハ今日五十人呼出之達致置候處不圖暗合
安心仕候まゝ今日三間之事縣官へ懸合候處居所不相分由ニ警保寮
より尋來候付明朝使差出可申候付爲御知被下度若相分不申候ハ、乍御面
倒御聞糺置被下度奉願候尤人撰方注意之處ハ猶又同人ハ御致意被下度い
曲之義ハ警保寮ヨリ及示談候筈ニ御坐候右拜答旁艸々如此御坐候尙拜表
ニ讓リ候頓首

正月廿四日

利通

孝允 高臺下

猶々亂妨罪人未白狀不致候得共昨日確證ヲ得タル由ニ御坐候付此上
ハ相違無御坐趣ニ聞へ候序ニ申上置候也

【解説】廿三日夜木戸來訪時務ニ付キ懇談ス翌日書ヲ利通ニ寄
 セ官吏ニシテ窃カニ商法ヲ敢テスル如キハ官紀上大ニ不可ナ
 ルヲ以テ商法規則制定ノ必要アル旨ヲ以テシ猶ホ三間正弘ヲ
 警保寮ニ登庸ノコトヲ勸告ス利通ハ木戸ノ意見ニ同意セシカ
 二月廿日ニ至リ三間ハ警視廳十等出仕ニ任セラレ尋イテ五月
 廿日大警部ニ進ミタリ

八〇七 岩倉公への書翰 明治七年正月廿九日

(大久保家藏)

【按】榎本公使ニ樺太處分問題ヲ委任セシムルコトニ付キ上申
 シ猶ホ久光公ノコトニ及ヒタルモノナリ

拜啓仕候昨朝申上候今般榎本奉命之旨趣就御決定愈順序御踐行之義云々
 則參朝之上條公にも言上候處尤之儀ニ付早々閣下にも御示談御宅におひ
 て一同へも御評議可有之与之御沙汰ニ御坐候間大に安心仕候扱猶又勘考

仕候處樺太裁判事件固より同氏の御委任之事与愚考仕候成程於本國處分
 可致筈ニ若其儀確報有之候得ハ勿論ニ候得共未何る報も無御坐候ニ
 付ハ此條肝要之事ニ御坐候間樺太經界之條以外ニ御委任狀無御坐候ハ
 ハ相濟申ましく候爲御心得申上置候

一明日久光參堂仕候ハ、十分條理ヲ以御説諭被成下度甚申上兼候得共御
 叮嚀ニ過候不返不氣儘ヲ申上候に相違無御坐候假令激怒仕候不も決
 不差支無之歸國ヲ申立候不も御免無御坐候得不何も御氣遣之事ハ無之
 候

右申上度乍恐以寸楮如此御坐候頓首々々

正月廿九日

利通

具視公閣下

【参考】其一利通日記抄 明治七年正月

廿九日九字岩公に至ル久光公ノ事ニ付言上且樺太處分榎本公使御舍

ノ義寺島氏伊藤氏内調ノ義猶御評議凡一定ニ就ルヲ決斷ノ事誠ニ不容易義候得テ漫ニ不可決事ナカラ朝鮮義務上ノ一條有之候ヨリ云々最初ヨリ立論候得ハ彌跡朝鮮御着手ノ順序何ク迄モ御居リ不相成候テハ不被爲濟旨切迫言上イタシ置候

【参考】其二三條公より岩倉公への書翰 明治七年正月廿日

(岩倉家文書)

御安全奉賀候過刻御妨申恐縮不少候扱朝鮮事件大久保公速ニ御同席ニテ參議中ニ申入候様内々噂も有之候ニ付唯因循致候様ニテ不宜候間何卒御面倒ちりら同人公内々下拙申述候邊ハ尊公ニも御承知相成猶篤申談し候上一同へも可申入旨一寸御一筆御遣し有之候様願度吳々遷延日を移し候事大久保ニも頗歎息仕候間此段申上候事ニ御座候依テ如此候也

一月卅日

岩 公

實 美

【参考】其三岩倉公より大久保への書翰 明治七年正月卅一日

(大久保家藏)

昨日御書一見御來示之條々何も承知致候様本奉命之義ニ付決定之廉順序之事貴卿御申入之趣ニテ昨日條公入來頗心配之件有之旨種々内談有之候來六日退出刻伊藤同伴入來約定候右ハ畢竟木戸かねて云々申出居候件有之故ニ候何分明日集會都合ヨク運ヒ度との旨趣ニテ入來有之事ニ候亦權太裁判事件應接様本ハ御委任之事御尤ニ存候是ハ過日寺嶋ヨも承知ニ候支那魯公使談話ノ末も同人不始末無之様を申居候久光卿之儀之事何も承候右早々如此候也

三十一

具 視

利 通 大 人

八〇八 吉田清成への書翰

明治七年二月朔日

(吉田子爵家藏)

【接】各國政體ノ取調方ヲ依頼シ猶ホ面談ヲ求メタルモノナリ

彌御安康奉敬賀候然去過日御示談申上置候取調之一條少々差急キ候ニ付
 乍御面働速ニ御調被下候様奉願候外ハ寛々ニ而宜舖候へ共各國政體之處
 丈御願申上候尤其内御面談仕度事件も有之候處今日大隈ハ承候得去横濱
 へ御出之由格別御手間取之候得去是非鳥渡も御歸相成候様奉願候
 明後日中ニ御歸京ニ而來ル四日朝拜接出來候得ハ別而仕合ニ御坐候大藏
 省御用も無余義与存候へ共前條遮而之事ニ付御調成らもとも四日朝御面
 會ハ相願度事ニ御坐候尤過日も申上置候通先内々之事ニ御坐候付其段去
 御含可被下候此旨早々頓首

二月朔日

大久保

吉田様

八〇九 岩倉公への書翰 明治七年二月二日

(牧野家藏)

【按】樺太及ヒ朝鮮處置ノコトニ付キ三條公へ談合ノコトヲ公

ヨリ報セラレシニ對シ答ヘタルモノナリ

昨日去賜書敬讀仕候猶條公へ御談合ニ而被爲示聞趣逐一了承仕候其後も
 反覆熟慮仕候ニ今日之危殆實ニ寢食も不安慮不肖也といへとも御旨趣確
 立不可犯之御憤發サへ被爲在候へハ水火モ敢而避さる之決心ニ而固よ
 一言可申上様無之乍去動もすれハ一昨夜來ハ怒髮衝冠之慨嘆頗ル相生し
 前人ハ勿論後人ニ對しても面皮無之ト乍殘念切迫唯々微軀之足らざるを
 恨む仕合ニ御坐候一片之衷情御憐垂可被成下候抑今日之事至重至難御心
 配ハ不及言候得共猶未幾層之困苦ヲ來スヲ知らも候さを共古人之困難ニ
 處シ千辛萬苦卒業せしよ比すれハ數百歩を譲るへしと愚考仕候今日よ
 先キニ社忠臣タルノ節操ハ初テ顯るゝ位之事よて甚深味可有之今此時ニ
 屈スル様之志シよてハ男子タルノ腸よてハ無之ト存申候誠ニ虚喝等舖
 思食も可有之候得共小臣平常之素志如此凡既往之順序ニ至候も必御配
 慮被成候義ハ誓而御請可申上ト信用仕候乍延引拜答旁以寸楮艸々猶拜謁

纏述可仕候恐々頓首

二月二日

具視公閣下

猶々木戸子ヨリ昨日別封參候付奉備御内覽候右ニ付るま許多之御咄有之事ニ是又御直話ニ可申上候也

【解説】當時三條太政大臣ハ坂元純熙等ヨリ朝鮮問題解決ノ爲メ舊參議ノ復職ヲ強要セラレ兎角曖昧ノ態度アルヲ以テ大ニ之ヲ慨シ本書ヲ岩倉公ニ呈シ心事ヲ吐露セルナリ利通日記前日ノ條ニ九時岩公ハ參上魯國朝鮮處分云々ニ付條公少シク曖昧ノ御容子有之十分御責申上置候トアルニテ知ルヘシ

【參考】三條公より岩倉公への書翰 明治七年二月初日

(岩倉家文書)

御安全奉賀候扱今朝ま大久保御面會之由彼一件程能御談祈望仕候拙者配慮仕候ハ唯々政府中不熟無之様所祈ニ亦大久保木戸兩氏合力而

已ニ有之候何分兩論ニ相成候るま前途之處懸念仕候此度之如き國家之安危ニも關し候事ニ付唯御互之決心ノミニテ事ノ成と申譯ニハ不可至候間偏ニ兩氏之戮力專要ニ存候拙者之苦慮唯此處ニ御座候間今日ニ至リ前議動搖之格ニ引受候るま不宜候間其邊殊ニ御注意御談所祈ニ御座候右ハ申迄も無之候得共過慮之餘一筆拜啓仕候草々拜具

二月一日

實美

岩公

八一〇 木戸孝允への書翰 明治七年二月二日

(木戸侯爵家藏)

【按】木戸ヨリノ書ニ答へ過日ノ會談ニ付キ諒解ヲ求メタルモノナリ

愈以御安康被爲成御坐奉敬賀候扱一昨日ハ態々御來賁被下難有奉存候昨日ハ又御懇書被成下謹る拜讀仕候意外之御挨拶ニ預リ誠ニ痛却之至ニ御

坐候其折ハ僕ニも十分之心肝ヲ盡し不申内勿々之御歸ニる甚遺憾不少候
何を兩日中ニハ拜趨猶又高慮奉伺度心得ニ御坐候公事ニ就ルハ御互ニ忌
諱を願候位ニルハ決る本意ニ無御坐固より僕ニハ御示諭之通四方一視彼
我之別なき事寸毫御疑念不被下様所祈ニ候公私之別を去らす雷同阿從
之態ハ君子之所可恥ニ候間過日之御高談ハ最感銘仕居候況乎平常之談柄
ト仕候様之輕薄ハ誓る無御坐候付御安心被下度奉願候昨日遅方歸宅仕候
付乍延引拜復而已如此御坐候何を近日遂拜接續述可仕候艸々頓首

二月二日

甲 東 拜

松菊尊臺下

猶々此一翼笑覽ニ備候間御叱留被下候得々多幸ニ御坐候

【解説】一月卅一日木戸ハ利通ヲ訪問シ時事ニ關シテ心肝ヲ吐
露セシカ所言稍穩當ナラサリシヲ感シ翌日書ヲ利通ニ寄セ過
言ヲ謝ス利通乃チ之ニ答書シテ自己ノ心事ヲ述へ却テ木戸ノ

真情ニ感謝シタルナリ

八一

西郷從道への書翰

明治七年二月三日

(西郷侯爵家藏)

【按】佐賀暴動鎮定ノ協議ノ爲メ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ
明朝十字迄之内是非御面會申上度儀有之候ニ付乍御面働御立寄被下候様
御願申上候此旨艸々頓首

二月三日

大 久 保

西 郷 様

【解説】是ヨリ先キ佐賀ニ於テハ征韓憂國ノ二黨相合シ共ニ政
府ノ方針ヲ批議シテ止マヌ竟ニ江藤新平・島義勇ヲ推戴シテ首
領トシ同志ノ徒ヲ近縣ニ募リ戰備ヲ整へ形勢不穩ナルモノア
リ而シテ是日東京ニ報到ル依リテ利通ハコレカ鎮撫ニ付キ西
郷陸軍大輔ト協議セントシソノ來邸ヲ求メタルナリ

八一二 大隈重信への書翰 明治七年二月四日

(大隈侯爵家蔵)

【按】西郷及ヒ岩村へ面談ノ爲メ大隈へノ訪問ヲ斷ハリタルモノナリ

今朝參上之御約束申上置候得共佐賀縣云々之事ニ付今朝之内西郷の内談之由有之且岩村赴任之事を促りし置今日十字正院にて面會之約束以し差懸不得止ニ付御斷申上候一件を正院にて御談申上候も相濟可申候此旨艸々頓首

二月四日

重信様

【解説】岩村赴任云々トアルハ高俊ノコトニシテ前月廿八日佐賀縣權令ニ任セラレシモ猶ホ東京ニアリ利通ハ同縣暴發ニ付キ速ニ赴任ヲ促シ且ツ鎮撫ニ關シ内命スルトコロアリシナリ日記是日ノ條ニ今朝西郷子入來佐賀縣士族暴動ニ付鎮臺兵云

々ノヲヲ談ス同車正院參朝岩村佐賀縣令の御委任云々陸軍省の御達等相運ハセ候トアルニ併セ見ルヘシ

八一三 臺灣蕃地處分要略 明治七年二月六日

(内閣公文録)

【按】大藏卿大隈重信ト連名ニテ提出シタルモノナリ
第一條 臺灣土蕃の部落は清國政府政權逮はさるの地にして其證は從來清國刊行の書籍にも著しく殊に昨年前參議副島種臣使清の節彼の朝官吏の答にも判然たれば無主の地と見做すへきの道理備れり就ては我藩屬たる琉球人民の殺害せられしを報復すへきは日本帝國政府の義務にして討蕃の公理も茲に大基を得へし然して處分に至ては著實に討蕃撫民の役を遂ぐるを主とし其件に付て清國より一二の議論生し來るを客とすへし

第二條 北京に公使を派し公使館を備へ交際を辨知せしむへし清官若し

琉球の屬否を問は、即ち昨年出使の口蹟に照準し琉球は古來我が帝國の所屬たるを言ひ並へ現今彌々恩波に浴せしむるの實を明にすへし

第三條 清官若し琉球の自國に遣使獻貢するの故を以て兩屬の説を發せは更に顧て關係せず其議に應せざるを佳とす如何となれば琉球を控御するの實權皆我が帝國に在て且遣使獻貢の非禮を止めしむるは追て臺灣處分の後に目的あれば空く清政府と辯論するは不可とす

第四條 清政府より臺灣處分に付論説を來さは昨年の議を確守し判然蕃地に政權不逮の證據を集て動かさざるへし若土地連境の故に付論すべき者生せば和好を以て辯すへし其事件至難に涉らば是を本邦政府に質して可あらん惟推託して時日遷延の間に即事を成し和を失はざるの機謀交際の一術なり

第五條 土蕃の地は無主の域と見做と雖清國版圖と犬牙接連の地勢なれば隣境の關係生し葛藤を發すへければ福建省に屬する臺灣港に領事一

員を置き淡水事務を兼轄せしめ征蕃の時に方りて船艦往來に付ての諸用を辨せしむへし右職掌の外に臺灣處分に付清國地方官との應接を擔當せしめ極々和好を保護するを長策とすへし但清國を視察したる福島九成を領事に任すへし

第六條 領事は蕃地の征撫に關せず征撫に任する者は應接に關せず蓋し其分界を明かにし和好を維持せん爲めなり若し事至重に涉らば是を北京在勤公使に傳致するを可とす

第七條 福州は福建省の一大港あれとも臺蕃處分の便路は臺灣及淡水を要地とす且福州には琉球館あれば暫く是を度外に置き嫌忌を避くるを佳とすへし

第八條 福島九成成富清風吉田清貫兒玉利國田中綱常池田道輝右六名を先に臺灣へ發遣し熟蕃の地へ立入り土地形勢を探偵し且土人を懷柔綏撫せしめ他日生蕃を處分する時の諸事に便ならしむへし

第九條 探偵の心得は熟蕃の地琅瑯社寮の港より兵を上陸せしむる積に付兼て此邊の地勢其他停泊上陸等の便利なる事に注意すへし

二月

大隈重信

大久保利通

【解説】是ヨリ先キ琉球ノ民臺灣ニ漂着シソノ蕃人ニ殺戮セラ
ル六年三月外務卿副島種臣特命全權大使トシテ清國ニ赴キ修
交條約ノ批准交換ニ際シ臺灣カ果シテ清國ノ附庸タルヤ否ヤ
ヲ質シ七月歸朝スルヤ政府ニ征臺ノ議起レリ會々朝鮮遣使問
題ノ紛議ノ爲メ一時中止ノ姿トナリシカ是年正月ニ至リ政府
ハ愈々利通ト大隈トニ蕃地問題ノ調査委員ヲ命シ斯クテ本書
ノ起草提出トナリシモノニテ是日ノ閣議ニ於テ遂ニ討蕃撫民
ノ師ヲ發スヘキニ決定シタリ而シテ利通等ハ臺蕃處分ノ調査
ト共ニ朝鮮問題ニ對スル調査ヲモ命セラレ本書ト前後シテコ

レカ趣意書ヲ提出シタリキ(後掲参照)

(大久保家藏)

【参考】岩倉公より大久保への書翰 明治七年二月六日

臺灣御處分御決定先以而安心候此上ハ問罪使命之人體御取極之義急
務と存候右ハ鹿兒島縣之人ニ而誰カ無之哉厚ク御勘辨有之度存候亦
土人撫育終ニ吾屬地タラン否哉ハ再ヒ御評議之筈尤其節之事ニ候得
共深く熟考候得之何卒吾レニ得ヘキノ目的立タキ者ト存候兼而福島
ニ承リ候處ニ而之必成易カラント存候得共費ス處他日補フニ足カ得
失ノ處十分御心配被下度且ハ六人之人體被遣候ニも右之邊御定見無
之而之奉命ノ事如何ト懸念候勿論貴卿大隈等御引請ニ而取調之事素
リ無御助才存候得共兼而樺太之義一嶋乍ラ必世論も可生ニ付而之
得失之上ニ而捨ルハ捨可得ハ得ルト着目有之度事ニ存候心附之儘一
筆申入候仍早々如此候也

二月六日

具 視

利通卿

尙々支那公使ハ柳原御治定可然就テ外務省鄭某支那國談判ハ能
心得居候由柳原も壯年之事同人差添被仰付候ハ、如何と存候早々
以上

八一四 三條公への書翰 明治七年二月八日

【按】佐賀暴動鎮撫ノ爲メ九州出張ヲ請ヒタルモノナリ
拜啓仕候昨日小臣九芴表出張之義奉願候通何卒今日中是非共御決定有之
候様偏ニ奉願候

輦轂之下御大事なる事ハ無申迄理解仕候得共九芴表之義兼テ人心動搖之
際此舉ニ由テ如何波及仕候も難圖此御處分ニ因テ全國之動靜ニ相關シ不
容易場合与奉存候輕重を以論し候も斷然此機を失ヒ且御處置有之候義
尤肝要ニテ殊ニ小臣職掌ニ對し候も人民之安否ニ相拘リ候大事之折坐

視傍觀仕候義心底ニおひて安堵仕兼候付幾重も御垂憐を蒙リ御許可被
成下度萬禱仕候跡之處テ同僚も羅列仕候付少も御懸念之義無御坐候且又
木戸も病體もハ候得共如此時宜ニ臨ミ候上ニ必進テ勉勵仕候事ヲ兼テ
了承仕候付乍無理此涯暫時之共毎日參
朝擔當相成候様今朝同人ハ懇談仕候積ニ御坐候此節ハ非常之御英斷無御
坐候テ夫噬臍之悔必然之事与奉存候此段拜趨可奉願候處今朝木戸へ參候
付乍憚以寸楮如此ニ御坐候拜首頓首

二月八日

利通

實美公閣下

【解説】佐賀ノ亂勃發スルヤ人心洶々トシテ萬一機ヲ失スル時
ハ動亂全九州ニ及フノ憂アリ依リテ政府ハ四日直ニ陸軍省ニ
命シテ鎮臺兵ヲ派遣セシカ利通ハ猶ホコレヲ重大視シ七日參
朝ノ際自ラ九州ニ出張シテ鎮撫ニ當ランコトヲ述ヘ更ニ岩倉

公ニ請フ公ハ木戸參議ノ同意ヲ得ルコトノ必要ヲ告ケラレタ
レハ利通ハ先ツ本書ヲ三條公ニ呈シテ允許ヲ請フト共ニ木戸
參議ヲ訪ヒソノ同意ヲ求メ九日遂ニ許可セラル、ニ至レリ而
シテ七日利通ヨリ呈セル佐賀出張ノ建白ニ關シテハ本書ニ「昨
日云々出張ニ義奉願候通」トアリ又日記七日ノ條ニモ「小子是非
實地ニ派出シ處分イタシ度旨建白イタシ候」トアリ三條公ヨリ
岩倉公ニ與ヘタル七日付ノ書翰ニモ「別紙大久保ハ差出候」トア
ルモ今コレヲ逸セリ

【參考】其一三條公より岩倉公への書翰 明治七年二月七日

(岩倉家文書)

大久保出頭之義 小生ハ今日ハ可否之返答ハ不仕猶尊公ニも御談之上
と申置候木戸返答ハ別紙之通りニ御座候愚意ハ尙明朝前九字參上拜
面萬々御談可申候

二月七日

實美

岩公

(別紙) 別紙大久保ハ差出候間入御覽候如何相成可然哉考按承度候何卒明朝

返答有之度候也

二月七日

實美

木戸 參議殿

(木戸筆) 於孝允ハ可然事ト奉存候殿重御着手有之度萬禱仕候敬白

【參考】其二立木兼善より大久保への書翰 明治七年二月六日 (内閣公文録)

佐賀縣貫屬寺院集會之末小野組ニ相逼手代悉皆逃散之趣過日傳報有
之即御届仕置候處尙又近縣騒々布趣別紙之通申來候向後ノ形勢若何
想像仕兼候得共萬一不慮ノ企有之テハ人民ノ塗炭ハ勿論
朝威ニモ關シ不容易儀ト存候就ホ漫然防禦之策ヲ講シ倉卒ノ變ニ
應スル覺悟無之テハ緩急ノ期ニ臨ミ狼狽失措彼レ其氣ヲ得ルニ至ラ
ン依ホ萬一激發暴舉有之節ハ臨機處分不苦哉且金五千圓爲豫備御下

渡被下度旨權參事ヨリ申來候旨事情上申旁此段奉伺候以上

明治七年二月六日 福岡縣令 立木兼善

内務卿大久保利通殿

【参考】其三立木兼善より大久保への書翰 明治七年二月八日 (内閣公文録)

追々上申仕候佐賀縣下動搖之義ニ付尙又別紙之通只今傳報到來候右文中縣地取締之爲五百人豫備之儀ハ已ニ昨日鎮臺出兵云々御達之次第縣地へ之報知ト途中行違申越候義ト奉存候間別段相伺不申候尤鎮臺申談之儀ハ再應縣地へ可申遣奉存候此段御届申上候也

明治七年二月八日 福岡縣令 立木兼善

内務卿大久保利通殿

八一五 木戸孝允への書翰 明治七年二月八日

(木戸侯爵家藏)

【按】佐賀出張ノコトニ付キ斡旋ヲ乞ヒタルモノナリ

尙々亂筆御高免可被下候本文之形行切迫之至情ヲ以申上忌諱ニ觸候も難圖恐縮仕候得とも何卒御聞捨可被下候

今朝參上御妨申上候其節御内話申上候末參 朝之上尙又條公岩公の篤与愚意上申仕置猶此上先生の御相談之上今晚中御返詞可被下与之事ニ御坐候就ハ何卒今朝御談御約束申上候邊十分御申上被下斷然此節ハ御許可相成候様御配慮被下度偏ニ奉拜願候尤當務奉命之上ハ是非共御採用被下候様何ク迄も可奉願決心ニ有之其段兩公の切迫申上置候次第ニ御坐候今般之事々平々凡々たる事ニハ中々治療出來候譯ニ無之政府之氣力飽ク迄御示し無之ハ益四方之輕侮ヲ受

御威權相立候事萬無覺束奉存候尤纔ニ小臣進退ニ付日を費し機會ヲ設ケ候義甚此際ニ當リ御腹之据兼候事ト内實ハ歎息仕候伏願クハ今朝縷述候微志御洞察以御垂憐大臣殿始御安心御兩斷之御憤發被爲在候様御盡力被遣度分御願申上候此段右御頼申上度態ト奉呈寸楮候頓首百拜

二月八日

利通

孝允明臺下

二白吳々も今日之事一日ヲ延候得去一日之害ヲ生し候儀顯然タル事候間機を見無二念御明斷轉禍爲福之御處置偏ニ所懇願ニ御坐候也

【解説】利通ハ是日木戸ヲ訪レテ佐賀出張ノ同意ヲ求メ且ツ政府向ノ斡旋ヲ懇談シタル後參朝シテ三條岩倉兩公ニ申請セシカ再ヒ木戸ニ依頼スル必要ヲ認メ本書ヲ贈リタルナリ當時内務卿トシテ責任ノ地位ニアリシ利通カ近時失墜シツ、アル政府ノ威令ヲ回復スヘキ絶好ノ機會ナリトシ一大決心ヲ以テ出張ヲ切望シタル事情ヲ知ルヘキナリ

【参考】其一三條公より岩倉公への書翰 明治七年二月八日

（岩倉家文書）

拜承木戸入來同人之處大久保同論寸刻も御英斷肝要時機を失し候も去不可然何を大久保ニても御遣し之程無之る去鎮定不可致と申居候

尤留主中も乍病中精々勉強可勤との事ニ御座候同人義未相待居御返事拜承大久保へ参り度と申居候依此段御答申入候猶御賢慮伺度候仍此段要用而已如此候也

二月八日

實美

岩公

木戸義ハ頻ニ急速御裁可相成候様申居候仍如此也同人引請之處ハ屹度相盡し可申様子ニ御座候兩人合論之上ハ其許可相成木戸ニも憤發致させ候も可然歟と存候乍去病躰之事故充分之處ハ如何と存候得共右先以此段申上候

【参考】其二木戸孝允より三條公への書翰 明治七年二月八日

（岩倉家文書）

奉復

孝允

尊書奉敬讀候過刻申上置候義ハ大意御内決巨細之儀ハ明日御評議之上と申思食之邊大久保ニも可申聞置との事ニ御座候右様岩倉公ニ

も御同意之御都合ニ御座候得者重疊と奉存候實ニある事ハ尤機を
不失事第一ニ及遷延ニ及ふ時ハ種々之患害を生し候例も不少依
乍恐切迫ニ奉存候事ニ御座候此段大略御答申上候恐々頓首敬白

二月八日夜

再白大久保より孝允へ差越し候書狀御序ニ御返與奉願候拜白

【参考】其三木戸孝允日記抄明治七年二月

八日大久保來訪九州騷擾ニ付内務卿之故ヲ以急ニ九州へ出張シ鎮撫
云々ノ相談アリ昨夜已ニ條公ヨリ御尋アリ余大ニ同意セリ尤余過ル
五日九州ニ至ラント欲スルトコロノ主意ヲモ陳述セリ故ニ大久保ニ
カワリ余急ニ九州へ下向シ此一騷擾ヲ鎮壓セント欲シ大久保ニモ相
論セリ然ルニ大久保是非内務卿タルヲ以急ニ下向セント欲シ自然時
日遷延スルトキハ其害モマタ不少ト而シテ朝廷ノ議速ニ決スル哉否
ヲ危フム故ニ余大久保ニカワリ病ヲツトメ留守中其任ニ當リ速ニ大

久保下向ノ事ノ議決セン事ヲ論ス大久保大ニ歡喜シテ去十二字條公
ヨリ御書アリマタ大久保ヨリ今朝之一事ニ付速ニ決議アランコトヲ
欲シ余ニ盡力ヲ申コセリ依テ余岩倉家ニ至リマタ條公ニ謁シ伊藤ニ
逢ヒ大意相決ス故ニ大久保ニ至リ其意ヲ陳フ大久保大ニ安堵セリ

【参考】其四三條公より岩倉公への書翰明治七年二月九日

(岩倉家文書)

扱大久保九州出張之義今日木戸ニも出仕彌決定仕候留守中木戸擔當
之義ハ大久保も能々申談置候様申入候御承知之通病體之事故精勤
ハ如何と懸念候得共成丈憤發勉強吳々も申置候猶苦慮仕候ハ朝鮮ノ
事ニ有之候大久保發途迄ニ是非木戸ニも承諾致候様無之ニ夫困難ニ
事と存候御互一決之事故大久保ニハ安心可仕候得共同人留主中第一
ニ引請之木戸ニ於テ異論有之候ハ事も相運不申薩人にも疑惑ヲ生
シ候ニ暫時之間と申も此一事極ニ關係不少候間何卒御神策を以
テ木戸ニも落着一定ニ相成候様情實上御洞察大久保ニも木戸と懇談

相整候様此一事ノミ唯々苦慮ニ御座候

二月九日

實美

岩倉公

八一六 黒田清隆への書翰 明治七年二月九日

(黒田伯爵家蔵)

【按】九州出張拜命ノコトヲ報シ乗船ノ都合ヲ依頼シタルモノナリ

昨夜御内談申上候小子出張之事彌今日表通拜命仕候就ハ速ニ踏出候儀肝要与存候處大坂より兵隊一隊乗セ付候得ハ是非當所より船用意無之不相濟海軍方ニも良船無之ニ付粗御咄承知仕候北海丸之儀借用ハ相調ましくや尤十二日あるは是非相發候都合ニいたし度念願仕候間分御相談申上候懸御目細々御頼談申上度候得共一應以書中早々如此御坐候何分有無御回答被下度若當分不在共ニ候ハ、又外ニ用意不致候不致不相叶候

付御願申上候拜首

二月九日

利通

清隆様

【解説】是日利通ニ對シ「御用有之九州表へ出張被仰付候事」トノ御沙汰アリ依リテ利通ハ西郷陸軍大輔ヲ訪ヒ大坂ヨリ兵士一隊ヲモ出兵セシムヘキコトヲ談シ乗船ノ都合ヲ黒田ニ依頼シタルナリ北海丸ハ開拓使所屬ノ汽船ナリ

八一七 黒田清隆への書翰 明治七年二月九日

(黒田伯爵家蔵)

【按】利通ノ要求セシ北海丸ハ十二日横濱着ナルヘキコトヲ黒田ヨリ報シ來レルヲ以テコレヲ謝シタルモノナリ

拜讀仕候北海丸之義愈十二日着品之由態々爲御知被下別辱奉存候就夫兼亦良船之由承及候付是非同船へ乗組度念願ニ御坐候間猶明日中御答

可申上候ニ付左様御承知可被下候折角被懸御心頭不淺奉厚謝候此旨拜答
のミ艸々頓首

二月九日夜

利通

清隆様

【参考】黒田清隆より大久保への書翰 明治七年二月九日

(太久保家藏)

前文略ス

借テハ過刻北海丸形行粗申上置候末只今別紙之通届出申候間左様思
召可被下候來ル十二日ニハ無相違着品之積併非常ノ變生スレハ此例
ニアラス何分前文宜敷様御承知可被下候此旨早々頓首

二月九日午後八時

黒田拜

大久保大兄閣下

別紙ハ略ス

八一八 北代正臣への書翰 明治七年二月九日

(四谷四郎氏藏)

【按】北代ノ書ニ答へ西下ニ付キ諭シタルモノナリ

御細書拜讀仕候之れを小子西下ニ付至誠懇切之御衷情被示聞趣致感銘
候就ハ猶勘考可致候其内必御騒立被成ましく候明朝之早天を遮る用向
有之外出候付明日中ニハ是非御決答可申上候付内務省ニ御待可被下候
尤小子之考慮ニ以し可被下候其上屹度御異條有之ましく存申候小子此
節之行深思熟慮之上此ニ及ぶる事候付決る餘計之御異論等御立被下まし
く此段御則答迄如此候也

二月九日夜

利通

正臣様

【解説】北代ハ時ニ内務省庶務課長ナリシカ省内ノ事情ヲ訴へ
利通ノ西下中止ヲ勸告シタルナリ

八一九 伊藤博文への書翰 明治七年二月十日

(濱田良策氏藏)

【按】西下ノコトニ付キ伊藤ノ書ニ答ヘ猶ホ出兵等ノコトニ付
キ打合セタルモノナリ

尙々今晚佐賀ヨリノ郵便狀過分入手仕候未一見不致候得共必面白得
物可有之候ト存候追テ御回可申上候

唯今歸宅仕候處御投書敬讀仕候扱西行ニ付種々御氣付被示聞趣逐一拜承
仕候谷干城云々如何様動搖之氣味モ有之候半歟今日西郷へ鳥渡面會仕候
得去此節白川縣鎮臺ヨリ報知トシテ參候者之咄ニハ左様之譯ニ無之ト申
居候乍去猶明日西郷野津取會諸手順廟算之筈ニ付將官同行之儀ハ其上否
可申上候様可致候大坂臺兵一大隊ニテハ御氣遣之趣是ハ成程實地之經驗
無之イカ、ト被察候是以明日談合之積御沙汰之通十分之備ハ具シ候方可
然兎角此一打ヲ以叩キ付不申候ハ 朝權ヲ示シ候譯ニ至リ兼候大事之
機ニ付相増候方十全ト存申候若一着誤候様之儀有之候ハ決テ相濟不申

候海軍之事モ實ハ今晚林謙三ヨリ頻リニ申出候趣モ有之候兼テ勝氏も甲
鐵ヲ回スとの申居候付彼方都合被成候得去無此上奉存候何卒以御賢慮御
談可被下候○木戸氏へ今晚參候處時宜ニ應シ候去山口縣兵隊編立候得
ハ隨分端の之間ニ合可申候付此方ヨリ兼テ示置候方可然ト之事ニ御坐候
若ヤ自然其等之都合ニ及候節ハ臨時之取計可仕ト存候○唯今歸宅之處別
紙長崎ヨリノ電報參居候供御一覽候同縣令も東上之趣ニ相見得此際實ニ
けしからの事と強腹至極ニ御坐候一體九州諸縣凡テ洵々タル形勢被察候
何分ニも佐賀之舉動常ならぬ去相違無御坐候實ニ人心難頼御一笑可被下
候此旨御回答迄早々如此尙拜眉ニ讓リ候拜首

二月十日夜

十二字八分前

利通

博文 高臺下

【解説】利通ノ西下ニ付キ伊藤ヨリ種々注意シ來レルヲ以テ之